

丹上遺跡（その9）

—丹比道隣接地の調査—

観音寺遺跡（その4）

—奈良時代集落隣接地の調査—

主要地方道 大阪中央環状線 美原ロータリー改良工事に伴う発掘調査報告書

1995年3月31日

（財）大阪文化財センター

表紙 説明

主要地方道 大阪中央環状線 美原ロータリーを上空から望む。

上が北である。南北に走る高架の高速道路が近畿自動車道、高速道路下に左側に曲がるのが大阪中央環状線、南へ直進するのが府道松原泉大津線である。東側へは羽曳野市へ通じている。左中央から斜めに北西側へ上がり、北端の池で西に折れ曲がるのが竹之内街道（丹比道）である。中央部分に道路が円を描いているのが美原ロータリーで、この中の南西側の地面が露出している箇所が今回の丹上遺跡の調査地点である。



巻頭カラー

観音寺遺跡を上空から望む。下に美原ロータリーが一部分見えている。調査地点は丹上遺跡調査地点の北側で、中央より少し上がった、近畿自動車道と中央環状線の間、地面が露出している所である。

下側の池から北東方向に伸びるのが斜行溝である。池から西に伸びるのが竹ノ内街道である。



観音寺遺跡 大溝と周辺の溝を上空から望む。上が北である。

序 文

丹上遺跡と観音寺遺跡に対する今回の発掘調査は、財団法人大阪文化財センターが実施してきた大和川以南での近畿自動車道及び府道大阪中央環状線改良工事に伴う一連の調査の最後に位置づけられるものである。調査原因は、河内平野を南下してきた大阪中央環状線が堺方面に直角に曲がる美原ロータリーの改良工事に伴うもので、1992年度より順次調査が可能となった部分から実施してきた。今回で、一部に未調査地が残るものの、主要部分の調査が完了した。

松原市立部に所在する観音寺遺跡と美原町丹上に所在する丹上遺跡は隣接しているが、両遺跡の間を古代の官道である丹比道が通っている。両遺跡とも既往の調査で丹比道に関連すると思われる遺構が検出されている。南側の丹上遺跡では方形に配置された奈良時代の掘立柱建物群が検出されており、官衙の可能性が指摘されている。また、北側の観音寺遺跡の方でも同時代の掘立柱建物を主とした集落が検出されている。

今回の調査では、両遺跡とも既往の調査地の西に隣接する部分が対象となっており、それらと関連する遺構の検出が期待された。調査成果の具体的な内容については本文を見て頂くとして、調査面積の狭さにも関わらず、奈良時代の掘立柱建物群の分布や遺構群の広がりについての一定の知見が得られたようである。丹比道に隣接する地域においては、この道路に関連する施設や集落等の存在が予想される所であり、これからも十分に注意を払った調査が必要である。

ともかくも、今回の調査でもって、大和川以南における近畿自動車道や大阪中央環状線関連の調査がほぼ終了する事になった。これらの一連の調査では膨大な遺構や遺物が検出され、従来あまり知られる事のなかったこの地域の歴史解明に大きな成果をあげる事ができた。これも、大阪府教育委員会、大阪府土木部、日本道路公団を始めとする関係各位のご協力の賜物であり、深く感謝する。今後とも、より一層のご理解とご支援を賜るようお願い申しあげる。

1995年3月31日

財団法人 大阪文化財センター
理事長 坪井 清足

例 言

1. 本書は、主要地方道大阪中央環状線美原ロータリー改良工事に伴う松原市立部四丁目地内の観音寺遺跡（その4）16Gトレンチ、および美原町丹上地内の丹上遺跡（その9）3Nトレンチの埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会の指導の下、大阪府土木部富田林土木事務所の委託を受けて財団法人大阪文化財センターが実施した。本調査に要した費用は、すべて富田林土木事務所が負担した。
3. 本調査は、平成6年10月3日から平成7年3月31日までの間実施した。
4. 本調査は、調査課課長 中西 靖人、主幹兼調査第3係係長 赤木 克視の指導の下に調査第3係主任技師 入江 正則が担当した。写真は同主任技師 平井 貞子が担当した。
5. 現地での調査にあたっては、次の方々にご指導、ご教示を得た。
大阪府教育委員会文化財保護課 田中 和弘・大楽 康宏
松原市教育委員会 芝田 新吾・岡本 利幸
財団法人 大阪文化財センター 芝野 圭之助 (敬称略)
6. 調査の実施に際しては、大阪府土木部富田林土木事務所松原事業所 鎌田 隆志氏に多大なるご援助を賜った。
7. 本書を刊行するにあたっては、次の非常勤職員の協力を得た。
山本順治・宮川和幸・林一歩・石田慎（大阪市立大学）、山本麻理（橘女子大学）、
松本 昭子、内山 信子、西田 久美
8. 本調査の航空測量や自然科学的分析は次の機関に依頼した。
写真測量 ワールド航測コンサルタント株式会社
花粉・珪藻分析 パリノ・サーヴェイ株式会社
土器胎土分析（化学分析・X線回析） 株式会社 第四紀地質研究所
9. 本書に使用した遺物実測図の縮尺は以下の通りである。
土器 1/4 石器 2/3
10. 本書で使用した標高はT.P.（東京湾平均海水準）を使用している。
11. 土色名の表示は1988年版の農林水産省農林水産技術会議事務局監修の土色標準帖に準拠している。

目 次

第 I 章 調査に至る経過	1
1) 調査経過	1
A. 丹上遺跡	1
B. 観音寺遺跡	2
2) 調査の日程	2
A. 丹上遺跡	3
B. 観音寺遺跡	4
第 II 章 調査の方法	5
第 III 章 位置と環境	6
1) 位置と地形	6
A. 丹上遺跡	6
B. 観音寺遺跡	6
2) 歴史的環境	7
第 IV 章 調査の成果	9
第 1 節 丹上遺跡	9
1) 遺跡の概要	9
2) 基本層序	9
A. I 層	9
B. II 層	9
C. III 層	10
D. IV 層	10
E. V 層	10
3) 遺構	15
A. 溝	15
大溝 1	15
溝 1、溝 2、溝 3、溝 4、溝 5	16
溝 6、溝 7、溝 8、溝 9～19、溝 20、溝 21	18
溝 22、溝 23	20
B. 井戸	20
C. 土坑	20
土坑 1、土坑 2、土坑 3、土坑 4、土坑 5、土坑 7、土坑 9、土坑 10	20

土坑11、土坑12、土坑13、土坑14、土坑15、土坑16、土坑17、土坑18	21
土坑19、土坑22、土坑23、土坑24	22
D. 落込	22
落込1	22
落込2、落込3、落込4、落込5	24
落込6、落込7、落込8	25
落込9、落込10、落込11、落込12、落込13、落込14、落込15	26
E. ピット	26
4) 遺物	28
A. 溝	28
大溝1、溝3、溝5	28
溝8	29
B. 井戸	29
C. 土坑	29
土坑5、土坑17、土坑18、土坑24	29
D. 落込	30
落込2、落込4、落込5、落込6、落込7、落込15	30
E. 床土層	30
 第2節 観音寺遺跡	 32
1) 調査の概要	32
2) 基本層序	32
A. I層	32
B. II層	32
C. III層	33
D. IV層	33
E. V層	33
3) 遺構	33
A. 溝	33
大溝1	33
溝2上層	39
溝2下層、溝11、溝53、溝55、溝56	40
溝60、溝61、溝63、溝64	41
溝65、溝66	43

B. 落込	43
落込2、落込3	43
C. ピット	43
D. その他の遺構	43
4) 遺物	44
A. 溝	44
大溝1 大溝1下部堆積層出土遺物	44
大溝1中部堆積層出土遺物、大溝1上部堆積層出土遺物	46
溝2 溝2上層、溝2下層	47
溝11、溝53、溝56	48
溝60、溝61、溝63、溝66上層	49
溝66下層	50
B. 落込	50
落込1、落込2、落込3	50
C. ピット	50
第V章 まとめ	50
1) 旧石器・縄紋・弥生時代	50
2) 古墳時代	51
3) 奈良・平安時代	51
4) 鎌倉・室町時代	52
5) 安土桃山・江戸時代	53
遺構一覧表	54
遺物一覧表	57
報告書抄録	58
遺物写真	59
付章	
観音寺遺跡16Gトレンチ大溝1埋積物の古環境調査(1)	
パリノ・サーヴェイ株式会社	64
観音寺遺跡16Gトレンチ大溝1埋積物の古環境調査(2)	
パリノ・サーヴェイ株式会社	80
観音寺遺跡(その2)他出土須恵器等胎土分析報告	
株式会社 第四紀地質研究所	87

挿 図 目 次

図1	丹上遺跡過去の調査範囲図 (1:5000)	1
図2	観音寺遺跡過去の調査範囲図 (1:6000)	3
図3	丹上遺跡地区割り図 (1:500)	4
図4	観音寺遺跡地区割り図 (1:500)	5
図5	丹上・観音寺遺跡周辺の遺跡分布図 (1:20000)	8
図6	丹上遺跡基本層序模式図	10
図7	丹上遺跡既往の調査 (1:1000)	11・12
図8	丹上遺跡遺構平面図 (1:200)	13・14
図9	丹上遺跡大溝1断面図 (1:40)	17
図10	丹上遺跡溝断面図 (1:20)	19
図11	丹上遺跡土坑断面図 (1:20)	23
図12	丹上遺跡土坑、井戸断面図 (1:40)	24
図13	丹上遺跡土坑断面図 (1:20)	25
図14	丹上遺跡大溝1出土遺物 (1:2 1:4)	27
図15	丹上遺跡落込断面図 (1:20)	28
図16	丹上遺跡落込断面図 (1:20、1:40)	29
図17	丹上遺跡井戸1出土遺物 (1:4)	29
図18	丹上遺跡出土遺物 (1:4)	30
図19	観音寺遺跡基本層序模式図	33
図20	観音寺遺跡G地区遺構全体図 (1:400)	35・36
図21	観音寺遺跡調査区平面図 (1:200)	37・38
図22	観音寺遺跡大溝1断面図 (1:40)	39
図23	観音寺遺跡溝2断面図 (1:40)	40
図24	観音寺遺跡溝断面図 (1:20 1:40)	42
図25	観音寺遺跡落込3断面図 (1:40)	45
図26	観音寺遺跡南側壁面図 (1:40)	46
図27	観音寺遺跡大溝1出土遺物 (1:4)	47
図28	観音寺遺跡溝11出土遺物 (1:4)	48
図29	観音寺遺跡溝61出土遺物 (1:4)	49

写真目次

写真1	観音寺遺跡クレーン撮影風景（北より）	6
写真2	丹上遺跡基本層序	15
写真3	丹上遺跡調査区北半部（東より）	15
写真4	丹上遺跡調査区中央部（東より）	16
写真5	丹上遺跡調査区南半部 大溝1（北東より）	16
写真6	丹上遺跡大溝1断面（部分）（北より）	16
写真7	丹上遺跡大溝1の底面に刻まれた偶蹄目類の足跡	17
写真8	丹上遺跡大溝1、溝5（北東より）	18
写真9	丹上遺跡溝5（南西より）	18
写真10	丹上遺跡井戸1 落込4（西より）	21
写真11	丹上遺跡井戸1内堆積層（西より）	21
写真12	丹上遺跡土坑22 落込5,11 溝9～19（西より）	22
写真13	丹上遺跡落込3,4 井戸1 土坑16,17,18（南西より）	22
写真14	丹上遺跡落込1,2,3,4 井戸1（南西より）	22
写真15	丹上遺跡落込2,3,4,11 井戸1 土坑22（西より）	24
写真16	丹上遺跡落込5,6,7,8,9,13（南西より）	25
写真17	丹上遺跡落込6,7,8,9,12 溝5（南西より）	25
写真18	丹上遺跡落込12,13 溝5（南西より）	26
写真19	土坑24出土遺物（左側 外面、右側 内面）	29
写真20	観音寺遺跡大溝1、溝63（南東より）	34
写真21	観音寺遺跡大溝1断面 全景（南より）	34
写真22	観音寺遺跡大溝1断面（拡大）（南より）	34
写真23	観音寺遺跡大溝1底部 遺物出土状況（西より）	41
写真24	観音寺遺跡溝2,11（東より）	41
写真25	観音寺遺跡溝2上層断面（西より）	41
写真26	観音寺遺跡溝11断面（西より）	43
写真27	観音寺遺跡溝53,61,62（北東より）	43
写真28	観音寺遺跡溝55（南東より）	43
写真29	観音寺遺跡溝56（東より）	44
写真30	観音寺遺跡溝56断面（西より）	44

写真31	観音寺遺跡溝61内 遺物出土状況（南西より）	44
写真32	観音寺遺跡溝61断面（南より）	48
写真33	観音寺遺跡溝63（北東より）	48
写真34	観音寺遺跡溝63,64,65（北東より）	48
写真35	観音寺遺跡溝56,64,65（北東より）	49
写真36	観音寺遺跡溝66（北東より）	49
写真37	観音寺遺跡落込1,2,3 溝56（北東より）	49
写真38	観音寺遺跡大溝1出土遺物 須恵器（図27-4）	50
写真39	観音寺遺跡落込2 遺物出土状況（東より）	50
写真40	観音寺遺跡落込2（北東より）	50
写真41	丹上遺跡 大溝1出土遺物（図14）	59
写真42	丹上遺跡 井戸1出土遺物（図17）	59
写真43	丹上遺跡 出土遺物（図18）	59
写真44	丹上遺跡 出土遺物（図18）	60
写真45	観音寺遺跡 大溝1出土遺物（図27）	60
写真46	観音寺遺跡 大溝1出土遺物（図27）	61
写真47	観音寺遺跡 大溝1出土遺物（図27）	61
写真48	観音寺遺跡 溝11出土遺物（図28）	62
写真49	観音寺遺跡 溝61出土遺物（図29）	62

表 目 次

表1	丹上遺跡遺構一覧表	54
表2	観音寺遺跡遺構一覧表	56
表3	丹上遺跡遺物一覧表	57
表4	観音寺遺跡遺物一覧表	57

第I章 調査に到る経過

1) はじめに

丹上遺跡、観音寺遺跡は、府道大阪中央環状線美原ロータリー改良工事に伴ない、1992年度より調査が継続して実施されてきた。丹上遺跡側に一部未調査区域が残るものの、それぞれ今回の調査が一応の最終調査となる。丹上遺跡、観音寺遺跡に跨がる美原ロータリーは、府下の主要幹線道路である府道松原泉大津線と堺羽曳野線、大阪中央環状線が平面的に交差している。これらの主要な道路が平面交差している事と、各道路の交通量が非常に多い事から、交通渋滞や交通事故が日常的に発生して、道路改良の要望が早くから出されていた。このため、大阪府土木部は、南北方向の大阪中央環状線と松原泉大津線側の道路構造を高架に改良する工事を計画した。大阪府土木部は、この道路構造を改良する予定地が埋蔵文化財包蔵地であり、これまで隣接地を調査してきた経緯から、その取扱いを大阪府教育委員会文化財保護課と協議した。その結果、大阪府土木部富田林土木事務所から財団法人大阪文化財センターに調査が委託される事になった。

2) 調査経過

A. 丹上遺跡 (図1)

丹上遺跡は、当センターにより分布・試掘調査を除いても過去10年ほど継続調査されてきた。その調査年度と調査範囲は図1に取りまとめた。丹上遺跡での最初の本調

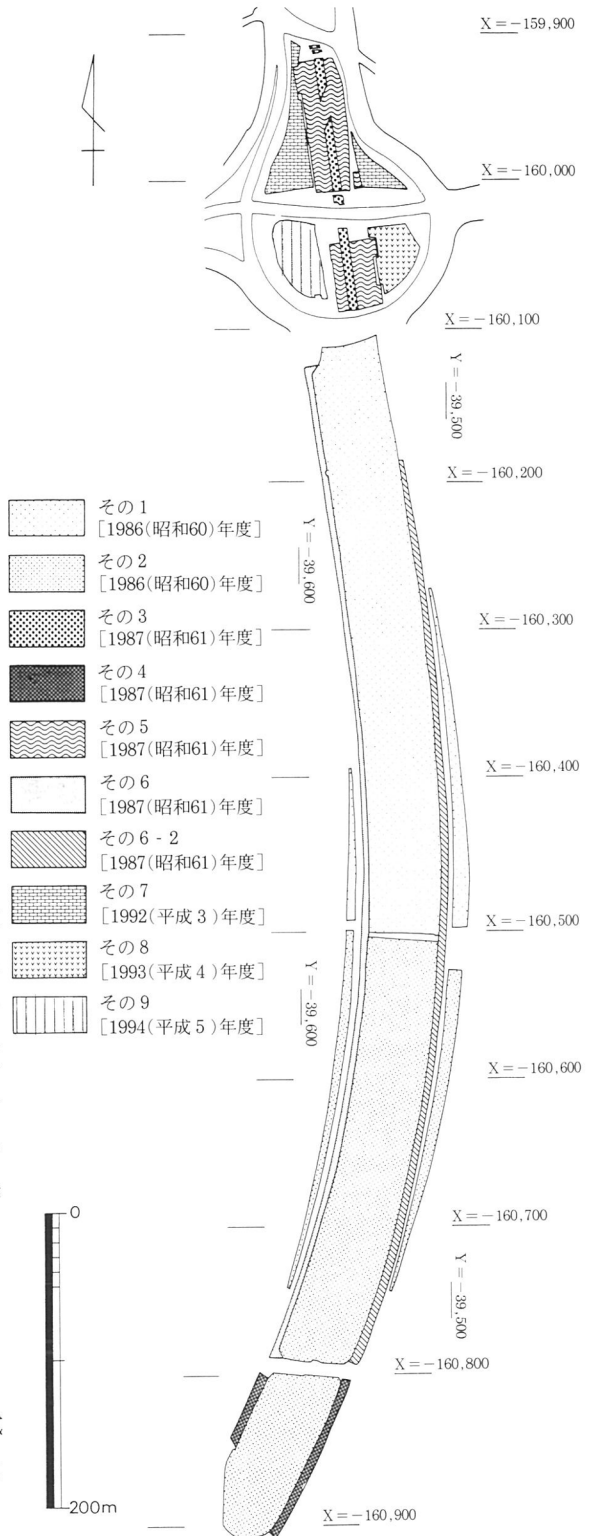


図1 丹上遺跡過去の調査範囲図 (1:5000)

査は、1985年度の近畿自動車道松原海南線及び府道松原泉大津線建設に伴うもので、美原ロータリー以南の長さ約 800mの範囲をその 1・その 2 に分けて実施している。この年度の調査で丹上遺跡の調査対象範囲の大半を終えた。翌1986年度には美原ロータリー内の近畿自動車部分をその 3・その 5、松原泉大津線の外側に設置される農道部分をその 4・その 6 として調査している。その後、しばらく調査が中断していたが、1992年度からは美原ロータリーの南北方向につながる大阪中央環状線と松原泉大津線側を高架化する改良工事に伴って調査が開始された。美原ロータリー内の未調査部は、近畿自動車道と府道堺羽曳野線に十字に分断されて 4 か所存在したが、1992年度にはその 7 として北東部と北西部、翌1993年度にはその 8 として南東部、1994年度にはその 9 として本書で報告するロータリー南西部の調査を実施している。この調査で、美原ロータリー内で未調査のまま残されている部分は、ロータリー中央を東西に横断する府道堺羽曳野線部分、堺羽曳野線と北側の深い水路に挟まれて調査が出来なかった部分、西側の環状部外側の三角地のみとなった。今回の調査区の形状は、南側と西側が円弧を描き、北側と東側が直線状である。南北幅は最大で約56m、東西幅は最大で約33m、調査総面積約 1,700㎡を測る。

B. 観音寺遺跡（図 2）

これまでに実施した観音寺遺跡の調査を、図 2 に示した。1984年度・1985年度に近畿自動車道松原海南線建設に伴う調査を府道大阪中央環状線中央分離帯内で実施している。1984年度には遺跡北端の第 1 調査区（A 地区）、翌1985年度には第 2 調査区（B・C 地区）から南端の第 6 調査区（G 地区）までを調査している。美原ロータリー改良工事に伴う観音寺遺跡側の調査は、大阪中央環状線北行き車線と近畿自動車道の間に残された細長い地域が対象となった。1992年度には、北側の第 3 調査区（D 地区）から第 5 調査区（F 地区）までを実施している。なお、調査区名は、東に隣接する近畿自動車道時に使用した呼称をそのまま受け継いでいる。1994年度には、その 4 として本書で報告する第 6 調査区（G 地区）の調査を実施しており、この調査をもって観音寺遺跡側はすべて終了した。今回の調査の対象は16G トレンチである。近畿自動車道の調査時に割付けられた G 地区最終トレンチ名に続けた名称である。調査区の南端は、旧の新池の北側堤までで現在は埋め立てられている。堤から南にある丹上遺跡までの間は池底となるため調査対象からは外されている。今回調査する16G トレンチは、長さ約 144m、幅約 8 m で、面積は約1,150㎡を測る。

3) 調査の日程

A. 丹上遺跡

丹上遺跡の調査は、当初関係機関の調整に手間取った。1995年の初頭に黒山警察署の道路使用許可が下り、立入り防止柵設置等の準備工に着手した。調査は機械掘削から開始した。盛土厚が 1.5m と厚かった事と、日本道路公団用地との境にある既存の立ち入り防止柵を残して作業を行ったため予定より遅れて機械掘削を終えた。人力掘削は 1 月下旬に開始し、2 月初めに調査区の包

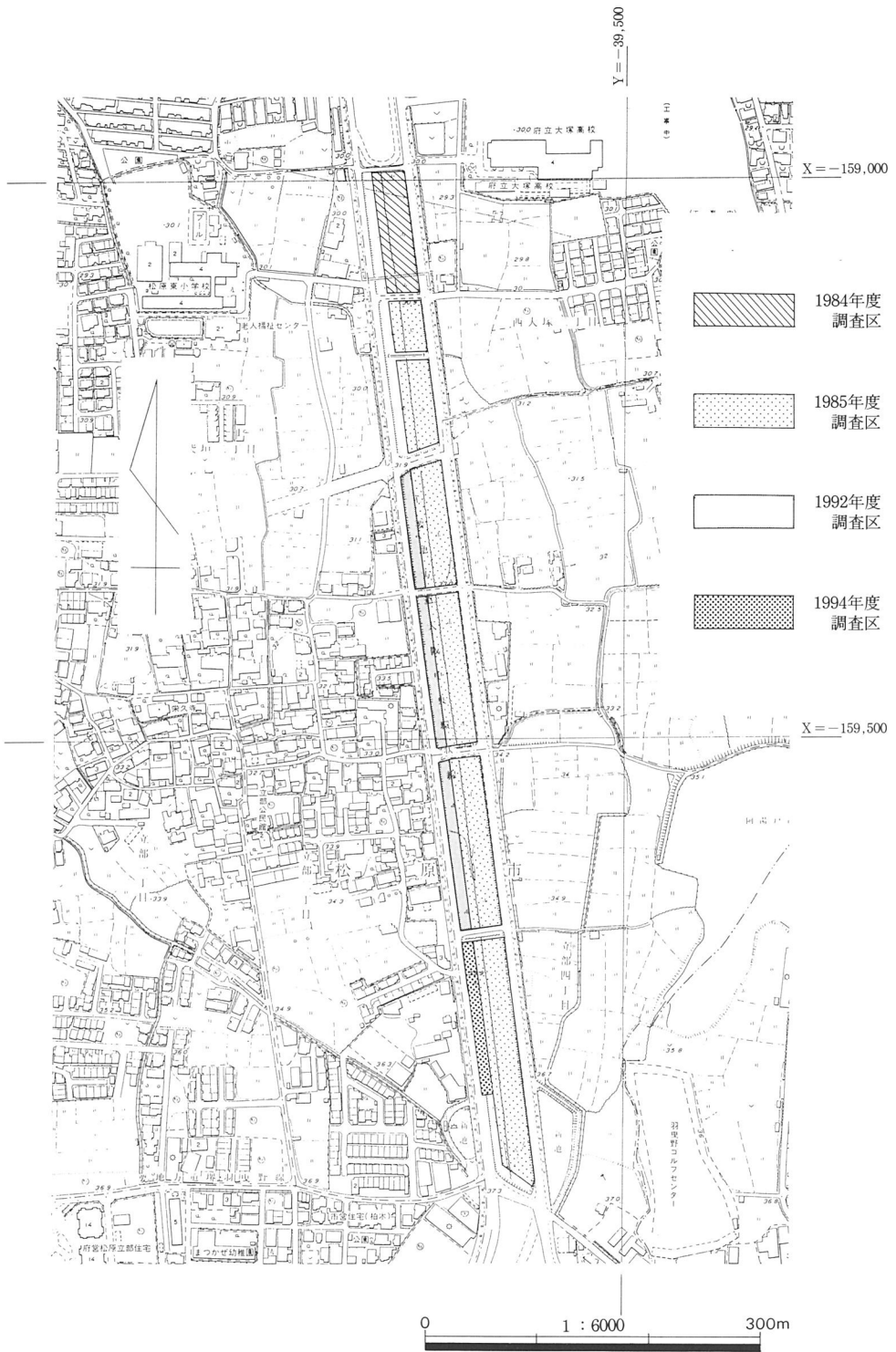


図2 観音寺遺跡過去の調査範囲図 (1 : 6000)

含層掘削を終了し、以後遺構の精査を行った。2月9日にクレーンによる写真測量を行って大半の作業を終えた。そして大阪府教育委員会文化財保護課の最終立会を受けて、残りの調査を進めた。2月中旬に大溝1の断ち割り調査や井戸の断ち割りと堆積層の掘削を行い、遺物の検出に努めた。その後写真撮影と図面作成を行い、2月下旬に現地のすべての調査を終了した。

B. 観音寺遺跡

観音寺遺跡の今回の調査の対象である18Gトレンチは、南半部が松原泉大津線や堺羽曳野線からの車両が大阪中央環状線に合流するための加速レーンに位置する。調査は1995年の初頭松原警察署より道路使用許可が下り、ガードレールや立入り防止柵設置等の準備工に着手した。ところが、1月17日に発生した阪神大震災の影響で近畿自動車道が不通となり、周辺道路が大渋滞したので18Gトレンチの道路舗装面除去を延期した。その後、近畿自動車道一部区間の開通に伴って周辺道路の渋滞が緩和してきたのでようやく舗装面の除去に着手した。この為人力掘削に着手できたのは2月上旬である。2月下旬に調査区北半部の長さ約90mの範囲でクレーンによる写真測量を実施した。3月上旬に残りの南半部を同様にクレーンによる写真測量を実施して、現場の調査の大半を終えた。この後、大阪府教育委員会文化財保護課の最終立会を受け、指示された追加調査を行って3月中旬に現地の調査をすべて終了した。

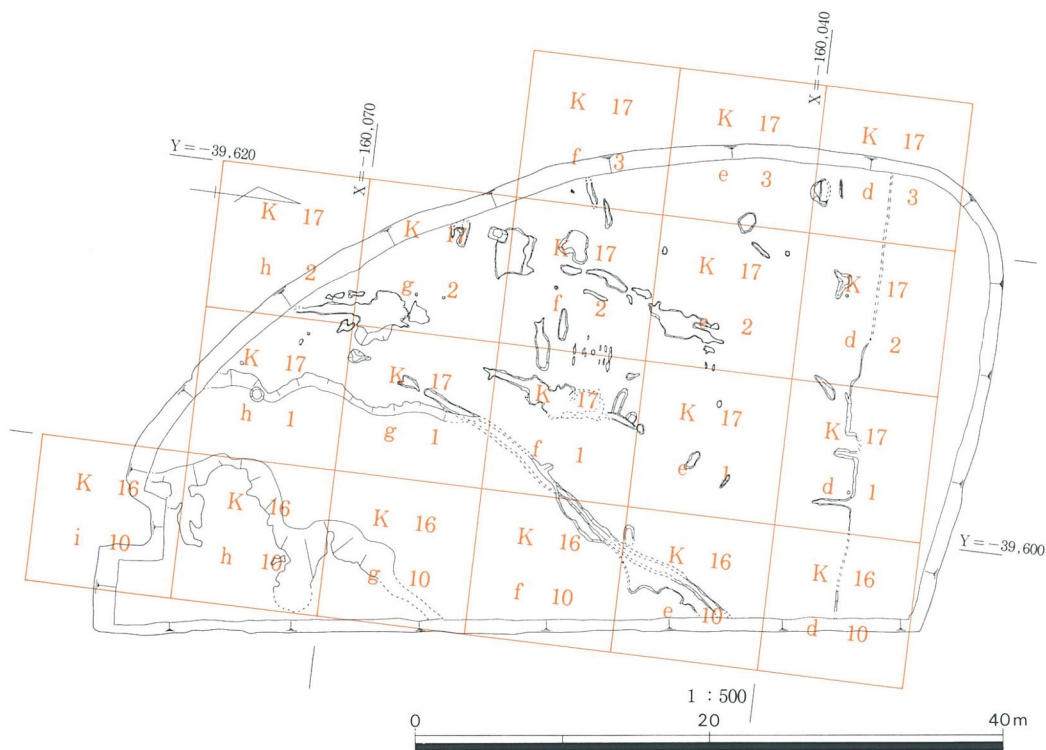


図3 丹上遺跡地区割り図 (1:500)

第II章 調査の方法

調査区の地区割は、大阪文化財センター調査マニュアルに則って設定している(図3、4)。地区割は国土座標軸(第VI座標系)を使用し、それを細分化して、第I区画から第VI区画まで段階的に範囲を縮小している。通常の調査で使用する第III・IV区画は以下の通りである。第II区画の2500分の1地形図の範囲である東西2km、南北1.5kmを東西20、南北15に細分して得られる一辺100mの区画を第III区画とする。第III区画をさらに東西10、南北10に細分した1辺10mの区画が第IV区画である。本書では第III区画と第IV区画を使用して地区を表示している。ちなみに丹上遺跡の第III区画はK-16、K-17区画に入り、観音寺遺跡の主な第III区画はG-17、H-17に入る。

両遺跡は遺構面測量を写真測量で行った。クレーンに大型写真撮影機をつり下げて撮影をおこなった(写真1)。図化は1/20図にて行い、それを縮小して1/100図を作成した。

また当遺跡の方位は国土座標を使用している関係上座標北を使用している。座標北と真北との関係は丹上遺跡では座標北から東へ $0^{\circ}14'40''$ 振って真北となり、座標北と磁北との関係は座標北から西へ $6^{\circ}15'20''$ 振って磁北がある。本書での標高は東京湾での平均海面(T.P.)を使用している。ちなみに大阪湾の最低潮位(O.P.)は東京湾平均海面に1.3mを加えると得られる。

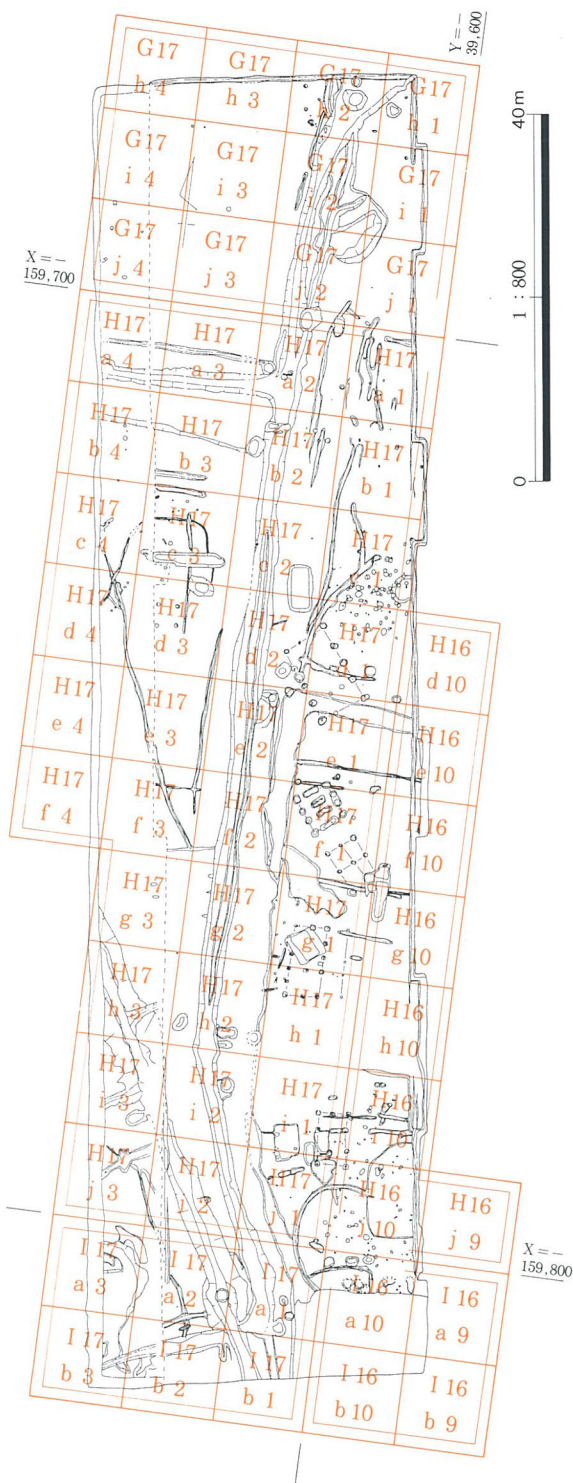


図4 観音寺遺跡地区割り図(1:500)

第Ⅲ章 位置と環境

1) 位置と地形 (図5)

丹上遺跡と観音寺遺跡は隣接しているが、今回の中央環状線の調査区域では新池の区域を調査しなかったため、観音寺遺跡が約200m離れて丹上遺跡の北側に位置する。行政区画は丹上遺跡が大阪府美原町、観音寺遺跡が大阪府松原市に所在している。

A. 丹上遺跡 (図5の14)

当遺跡は大阪府南河内郡美原町丹上地内にあり、地形的には中位段丘上に立地している。この中位段丘面は、緩やかに北に下降して北端は河内平野の下に潜り込んでいる。

また、東西方向にも非常に緩やかであるが、起伏をもっている。調査区の標高は、南端の最も遺構面の高い箇所までT.P.36.84m、北端の最も低い遺構面の標高でT.P.36.45mを測る。調査区内の南北間の距離は約56mを測り、この間に約0.4m下っている。調査区は、主要地方道大阪中央環状線と松原泉大津線に囲まれた道路の間で、円形のロータリーの中に位置する。道路を隔てて隣接する南西側は農地であり、水田と畑の二毛作を行っている。東側は羽曳野市方面に抜ける主要地方道堺羽曳野線がほぼ真東に伸びており、その沿線には中古車販売店や工場、倉庫、食料品店が立ち並んで、活気に溢れた印象がある。この調査地からは周囲に倉庫や背の高い建物が多く立ち並んでいるので、東西南北ともほとんど見通しが得られない。わずか300m北側の観音寺遺跡での周囲の見通しとは大きく異なっている。

B. 観音寺遺跡 (図6の9)

当遺跡は、松原市の南東隅に位置する立部に所在し、なだらかな中位段丘上に立地する。今回の調査区内の地形は中央部付近が最も高く、北端と南端が低い。標高は北端がT.P.34.40m、中央部の最も高い箇所はT.P.34.78m、南端の新池に近い位置ではT.P.34.34mを測る。基盤となる中位段丘層最上層は、黄色系の粘土ないしは粘質土層である。古代の丹比道は調査区南約70m付近を通過している。南東側から北西側へ直線状に伸びてきた道路が、調査区の丁度南側付近で西方向に折れている。一方丹比道に沿って南東側から流下してきた水路は、この屈曲点で西側に曲がらずにそのまま北西側に直線状に伸びている。これが現代でも使用されている主要な農業用水路である斜行溝で、松原市中央部付近の水田を潤している。丹比道と水路の経路の違いは何かを解明する糸口になるかも知れない。

周辺の景観は、調査地北西側に観音寺の集落がある。調査地西側は図2ではあまり建物が立ち並んでいないが、現状は新しい建売住宅が並んでいる(巻頭カラー1)。一方西側は水田が広が

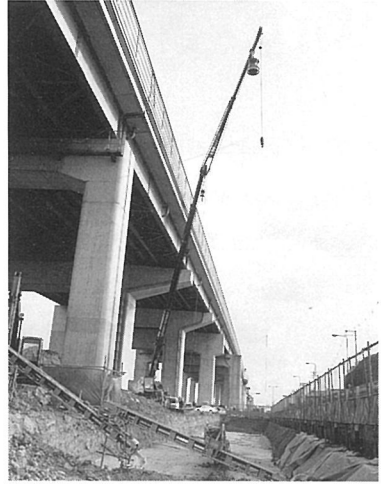


写真1 クレーン撮影風景
(北より)

り、水田の東側の旧開析谷を堰止めた阿湯戸池とその南側の溜池はゴルフの打ち放し場になっている。従って東側の見通しは良く、北側の河内大塚山古墳から遠く生駒山地、また二上山から金剛葛城山系まで見ることができる。ところが近年、住宅地の建設が進むとともに大阪中央環状線に隣接している事から倉庫や工場が立ち並び始めており、急速に眺望が失われつつある。

2) 歴史的環境 (図5)

丹上遺跡や観音寺遺跡など中位段丘上の遺跡の調査では、必ずと言って良いほどサヌカイト製の剥離片が数点出土する。これは、旧石器時代か縄文時代に中位段丘上面が当時の人々の生活圏であったらしい事を示している。時にはサヌカイト剥離片の集積遺構が見られる場合もあり、これらの時代に中位段丘上面を居住域としていた可能性がある。これらの中には石鏃を伴う例が見られて、旧石器時代だけではなく、もう少し後の縄紋、弥生時代まで下る可能性もある。これらの時期の遺構面が存在していた中位段丘層の上面は後の水田開発で削られている場合が多い。従って遺物出土量も少なく、原位置で出土する例も非常に少ない。遺跡の遺存状況は良好でなく、失われてしまった遺構、遺物が数多くあるようだ。

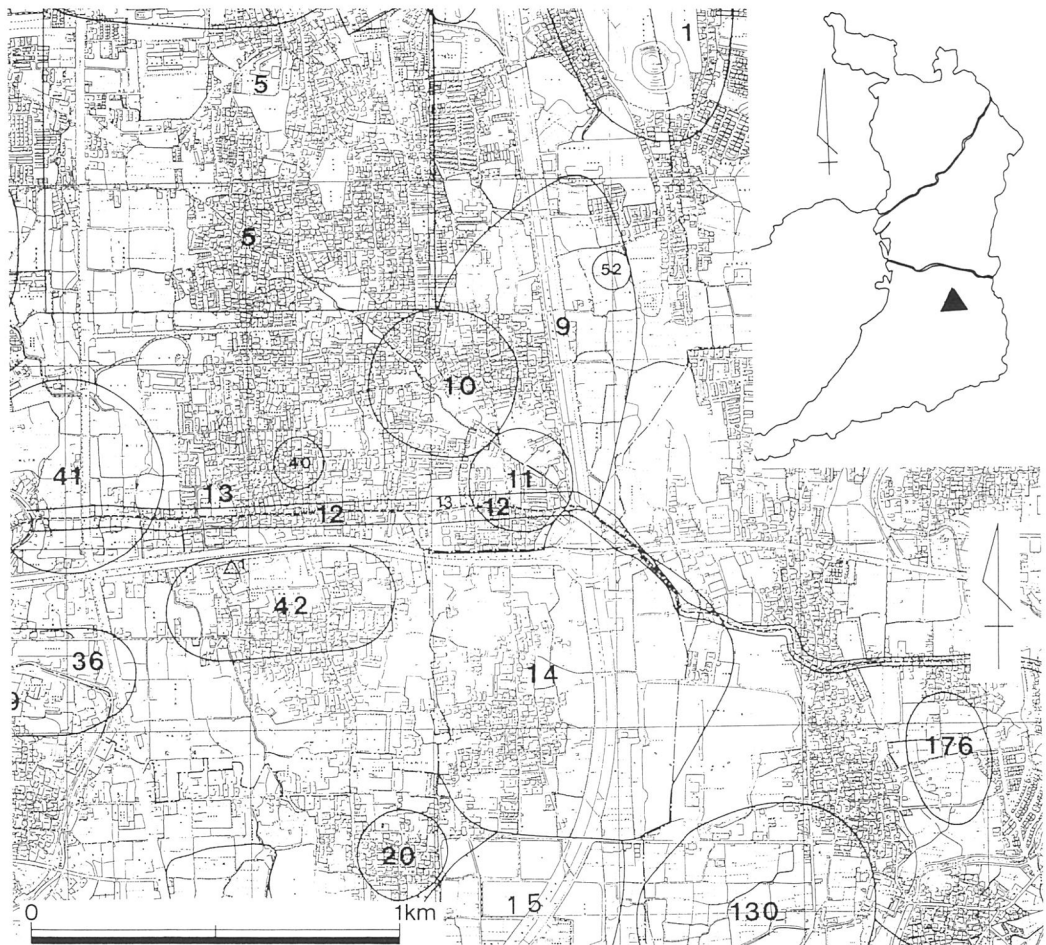
弥生時代には、当調査地からわずか約10kmしか離れていない河内平野に弥生文化の華が大きく開いていた。それにもかかわらず、当調査地は地形が中位段丘上面と言う水を得難い環境のために、弥生文化がほとんど伝わっていないようだ。当時の水の制御技術では、中位段丘層上面に水を送り上げられず、天水や湧水しか水を得られなかったようである。従って水田耕作は不可能に近く、その他の畑作が細々で行われていたかも知れないが、遺構で残っていないのでほとんど実態は分かっていない。そうは言っても全く弥生文化が見られない事は無く、西除川や東除川沿いの水を得やすい沖積地や開析谷などの谷水を得られる所に小規模な開発が進んでいたようだ。弥生土器や石包丁が少量づつ開析谷や隣接した中位段丘上から出土している。当遺跡の周辺で、弥生時代の遺跡は発見されていないけれども、東除川や西除川に沿った所に未発見の弥生時代の遺跡が存在しているかも知れない。

古墳時代前期、中期に中位段丘上面にある湧水地点に大きな穴を掘り、湧き出る水を溝で導いている跡が発見されている。この頃から中位段丘上面の湧水地の水を利用した開発が進みつつあったようだ。布留式土器などが中位段丘上の遺構内から出土している。丹上遺跡にも湧き水を利用した遺構が見られるが、長く続かなかったようだ。

古墳時代後期に丹上遺跡に方墳が作られる (図7)。この方墳は丹上遺跡の北端付近にあって、墳丘に円筒埴輪を少数立てていたようである。この頃に近隣で広い範囲の開発が始まり、集落に隣接した中位段丘の高い側に墓が作られたようだ。当遺跡東側の東除川に沿った羽曳野市域に属する郡戸東遺跡にも帆立貝式の古墳などの古墳群が明らかになり中位段丘上に幾つかの古墳群が作られていたようだ。7世紀に入るか入らない頃に狭山池が築造されて、狭山池を基幹とする農業用幹線水路が中位段丘上の尾根筋に幾つか掘られたらしい。大規模な灌漑設備は中位段丘上の

水田開発を可能にするし、枝状に中位段丘を浸食している開析谷に水田が作られる状況が生みだされたようだ。中位段丘上に繁っていた樹木類がしだいに伐採されて、雑木林であった景観が、少しずつ水田が広がる景観に変わりはじめたようだ。

奈良時代は周辺が一層変化を見せる。周辺にも集落や寺院が出現しはじめる。観音寺遺跡と丹上遺跡の調査地区の間に古代の官道である丹比道が通過している。そして、調査地点の約100m南側に掘立柱建物が方形に建ち並ぶ。これは幾つかの建物が一辺約30mの方形に並んだ遺構である。この周辺に倉や附属する建物が少ないなどから、郡衙やそれに類した上級の役所ではないようだ。たとえばもう少し下位の丹比道を通行し、流通している物資を管理する役割を担っていたような性格の建物群であったのかも知れない。調査着手前にこれらの建物群が今回の調査地に広がるかどうかを問題とした。結果は後に述べる通り全く広がっていなかった。また観音寺遺跡で



1. 大塚山古墳 5. 丹比柴籬宮跡 9. 観音寺遺跡 10. 立部遺跡 11. 観音寺跡 12. 竹内街道(丹比道) 13. 丹比道周辺遺跡
 14. 丹上遺跡 15. 真福寺遺跡 20. 真福寺跡 36. 八下遺跡 40. 薬仙寺遺跡 41. 清堂遺跡 42. 丹南遺跡
 52. 立部古墳群 130. 郡戸遺跡 176. 郡戸東遺跡

図5 丹上・観音寺遺跡周辺の遺跡分布図 (1:20000)

奈良時代集落が調査されて、瓦片が出土している。近くに寺院が建立されていたようだ。中位段丘上に少しずつ新しい集落が時代とともに出現している。中位段丘上の新しい開発が進行しているようだ。

平安時代の遺構は分からないが、中世には中位段丘上に新しく出現した数多くの集落に丹南鋳物師が居住していた。調査地の北の観音寺遺跡や南の丹上遺跡、真福寺遺跡、太井遺跡等では鋳物師に関連した遺構や遺物が調査されている。中世の中位段丘上は奈良時代以上に水田化が進行していたようである。そして狭山池の改修工事に伴って貯水量が増加して、潤す水田面積が増加しているし、用水路の途中に幾つかの新しい溜池が掘られて、水を蓄えて一層生産力を高める努力がなされていたようである。

近世の集落は、現在の集落とほぼ同様な位置にあって重複している可能性が高い。水田開発も現状に近い状態まで近づいて、中位段丘上のほとんどが水田化していたようだ。そしてすこしずつ新しい溜池の築造もなされていたようだ。

第Ⅳ章 調査の成果

第Ⅰ節 丹上遺跡

1) 遺跡の概略

当遺跡の旧地表面の耕作土層の上面の高さはおおよそT.P.37.1mから37.2mを測る。検出した遺構は、奈良時代から中世、近世である。奈良時代に大溝1と溝5が掘られている。落込は中世の開発の痕跡と思われる。この地域の開発をよく示しているのが井戸1である。この井戸1の上層から近世前半期の天目茶碗が出土しているが、下層から瓦器碗が出土している。中世に掘られて近世前半期に埋められたと推測される。この地域の開発の一側面を示している。

2) 基本層序（図6、写真2）

基本層序は上からⅠ～Ⅴ層に分層した。Ⅲ層は薄くてほとんど堆積していない。

A. Ⅰ層

この層は旧耕作土層で、層の厚さは約15cmである。丹上遺跡では耕作土層は北端の攪乱部分や用水路跡など掘削された跡を除いて、ほとんどが残っていた。

B. Ⅱ層

この層は床土層である。鉄分の沈着の違いにより4枚の層に分けられる。最上層のⅡ-1層は灰黄色2.5Y7/2粘砂質土層で、最も厚い箇所では5cmである。次のⅡ-2層は明黄褐色2.5Y6/6と灰黄色2.5Y7/2の混合粘砂質土層で、最も厚い箇所では15cmを測る。その下のⅡ-3層は浅黄色2.5Y7/3と明黄褐色10YR6/6の混合粘砂質土層で、最も厚い箇所では20cmを測る。最下層のⅡ-4層は

にぶい黄色2.5Y6/4シルト質層で、最も厚い箇所では20cmを測る。各層によって厚い場所が異なる。II-1~II-4を合わせた最も厚い箇所は約45cmを測る。これらの層序は、調査地全域でほぼ同様に堆積している。中世に堆積したと考えられる。

これらの各層は比較的明瞭に分層できる事から、堆積時期が少しづつ異なっていた可能性がある。この床土層の違いは鉄分が沈着して土色に変色する事によって黄灰色の色調が微妙に変化するためである。これは水田の荒起こし前に客土を行って、水田の嵩上げを行なったために、水田耕作の荒起こし時に攪拌されない層が下層にできて、ここに鉄分が沈着して黄灰色の縞模様を示すようになったと考えられる。

今回の調査では、調査開始に手間取り時間的な余裕が少なく、床土層の各層の色調差を面的に調査追求する事は省略して、最下層の中位段丘層上面の遺構面を調査した。これは床土層内の色調差を1枚ごとに調査をしても、荒起こし時に攪拌が及ばなかった層が残っているだけで、遺構が発見される可能性が少ないと推測したためである。しかし、1枚ごとに分層発掘すれば1枚ごとの時代を推定する資料が得られて、詳しい年代を推定できたかも知れないが、先の理由で省略した。II層の下はV層で、中位段丘堆積層である。この上面から遺構が掘り込まれている。

C. III層

中世と思われるIII層は大きな遺構の上層に堆積している。調査地全体を覆う形でなく、狭い範囲にある。落込や溝の上層にあり、中世に掘られて埋没した可能性がある。断面模式図にはわずかな範囲に分布しているので記載していない。

D. IV層

この層は奈良時代の堆積層である。調査地全域を覆う堆積層がなく、遺構内堆積層に見られる。主に奈良時代の大溝、溝などの埋土が該当する。

E. V層

中位段丘層最上層である。この層は色調や土質の違いで上下2層に細分される。

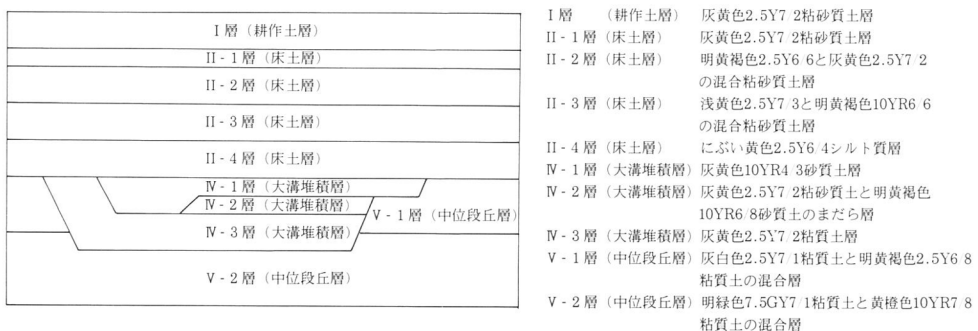


図6 丹上遺跡基本層序模式図

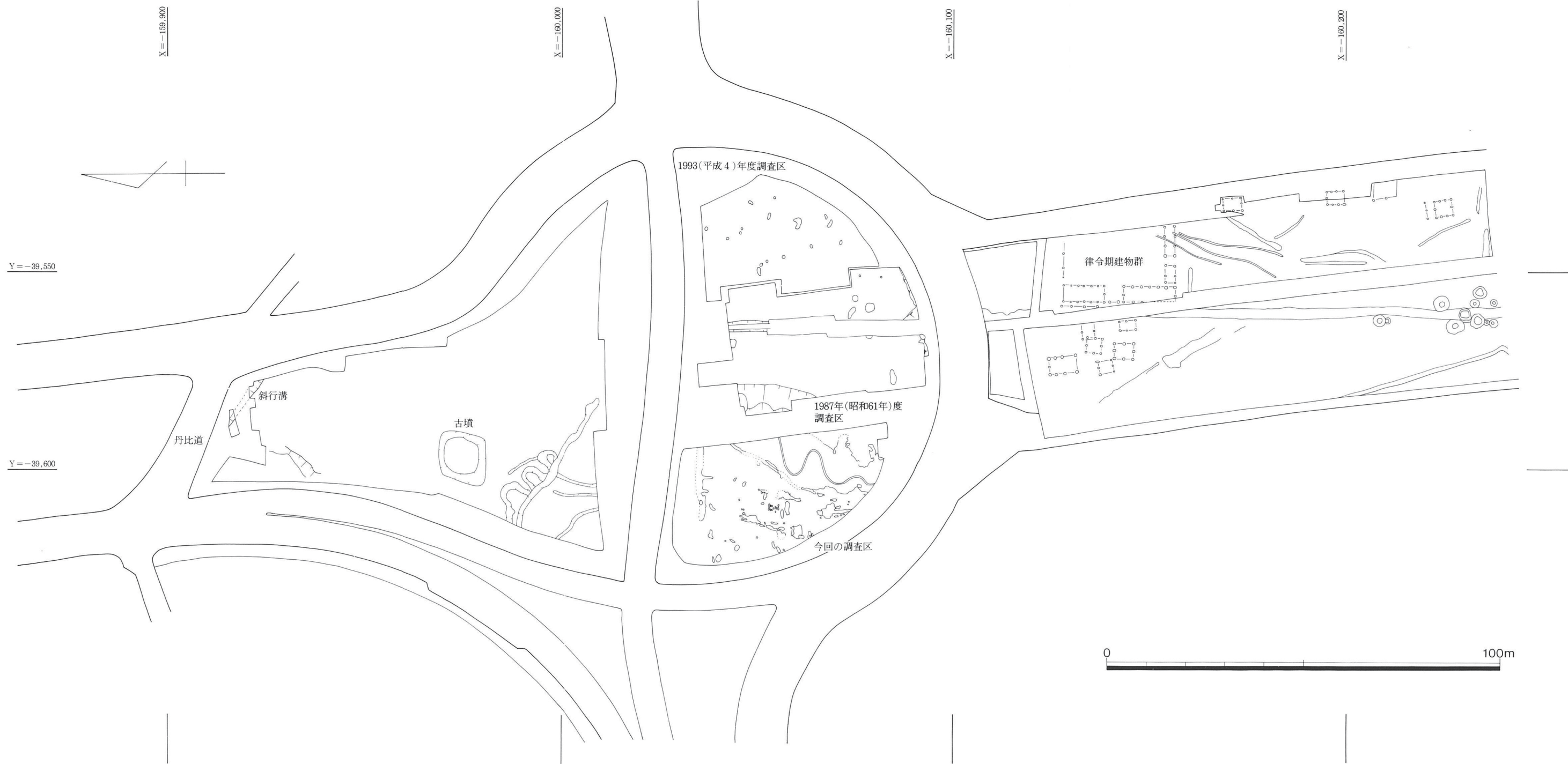


図7 丹上遺跡既往の調査 (1 : 1000)

丹上遺跡 (その9)

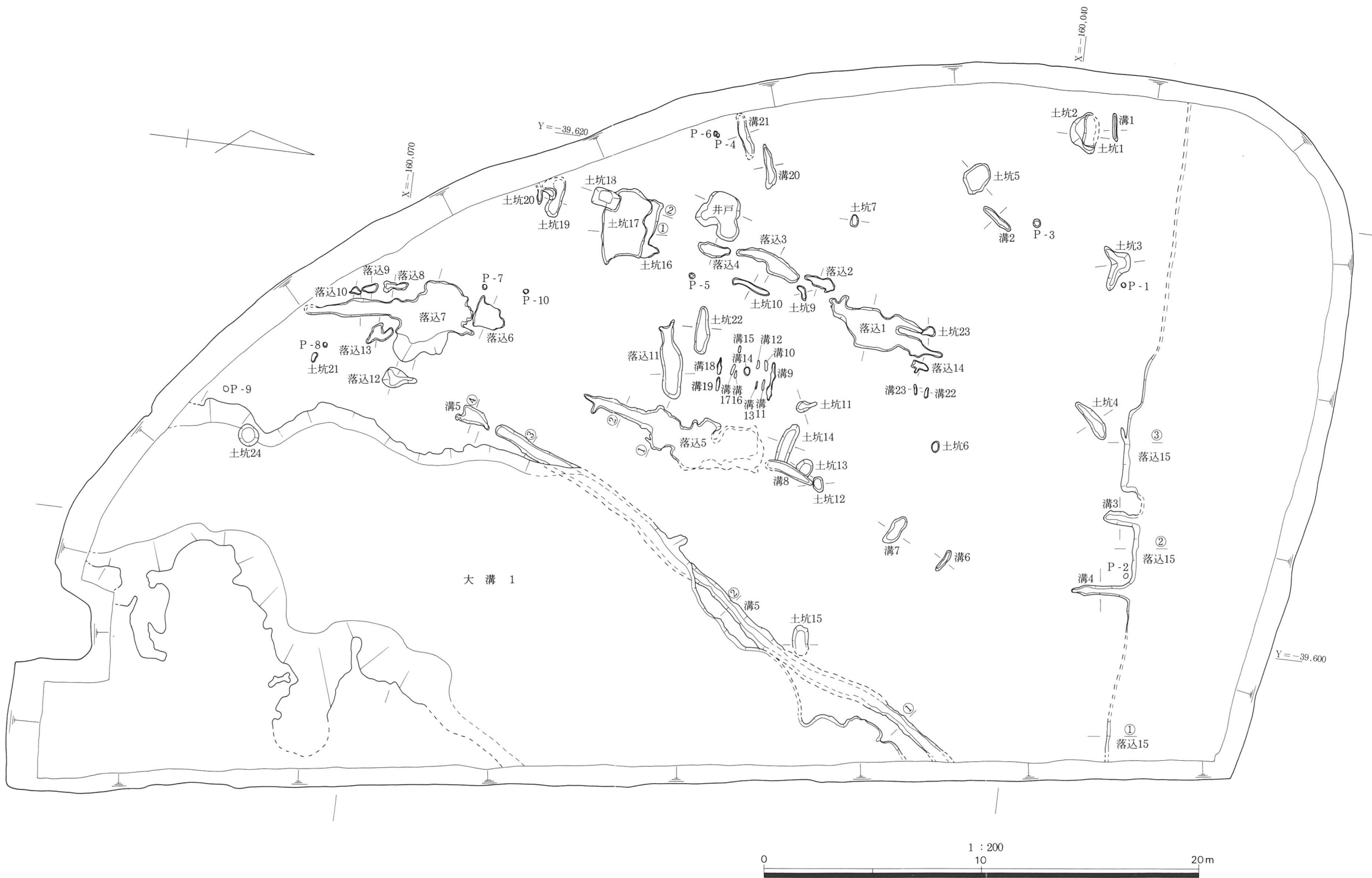


図8 丹上遺跡遺構平面図 (1 : 200)

丹上遺跡 (その9)

3) 遺構

A. 溝

大溝1 (図7,8,9、写真4,5,6,7、表1)

浅くて幅広い断面形状を示して、最深部のみ急に深くなる。調査地南側から流入して、大きくS字状に2回屈曲して北側へ流れ出ている(写真5)。検出長18.8m、幅6.9~2.8mを測る。最も深い砂層部分は灰紫色系の色調を示して深さ0.46mを測る。全体的に緩やかに傾斜している事から水量もそう多く無いようである。浅い流れにもかかわらず、以外と自然な状態のまま、浅く窪んだ中を気配に流れていたようである。埋土は上層から鈍い黄褐色砂質土層、中層が灰黄色粘砂質土層と明黄褐色砂質土層のまだら模様の層、下層は灰黄色粘砂質土層である(写真6)。最深部は灰紫色の砂層である。大溝1が埋没した後に、その部分が窪んだようで、この上層にIII層の堆積層が見られる。緩やかな傾斜を示す大溝1の断面形状から、自然の流路のようで、人為的に開削された可能性は低いようだ。その1調査区やその7調査区で大溝1へ続くかも知れない浅い窪んだ地形の自然流路らしいものが調査されている。これらから大溝1へと続いて流れていたかも知れない。

出土した遺物は時期不明のサヌカイト破片や古墳時代の須恵器や土師器、そして奈良時代の須恵器や土師器である。平安時代では黒色土器片が出土している。大溝の底面から偶蹄目類の足跡が見られた(写真7)。大溝の底部の最深部から少し岸に寄った地盤が柔らかい箇所に、偶蹄目類が歩んだ足跡が数十見られる。古墳時代か奈良時代頃であろうか。これらは牛か鹿と考えられる動物が生息していた事を示している。それは丹比道を通して物資を輸送して来た牛が大溝の水を飲みに来た時に付いた跡であったかも知れない。あるいは周辺に鹿などが生息していて水を飲みに来た時の痕跡かも知れない。いずれにしても必ずめが2つに割れた動物がこの大溝付近に居

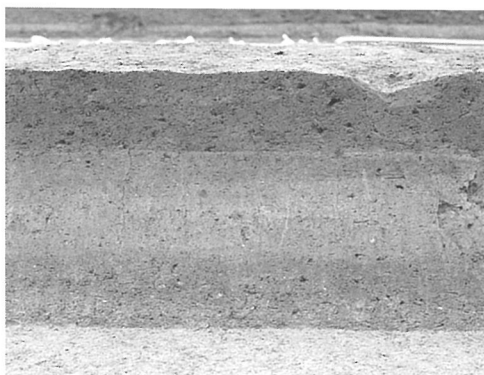


写真2 丹上遺跡基本層序



写真3 調査区北半部(東より)

た事を示している。

大溝は出土した遺物から古墳時代後期から流れて、奈良時代に丹比道が使用されていた頃も、大溝は蛇行しながらゆるやかに流れていたようである。奈良時代頃から次第に埋没して、奈良時代後半期には流路も次第に埋没してゆき、僅かに窪んだ地形を示していたと考えられる。奈良時代終末頃におおよそ埋没して緩やかな窪みを残すだけになっていたようである。この窪みに堆積した土層から出土しているのが、黒色土器である。

溝 1 (図8,10、表 1)

調査区の北西隅に位置する。東西方向に延びて長さ約 2 m 弱の短く、幅の狭い浅い遺構である。

溝 2 (図8,10、表 1)

調査区の北西側に位置する。南西から北東方向を向いている。断面形状は少し深い。埋土は灰黄色粘砂質土と明黄褐色砂質土の混じった層である。

溝 3 (図8,10、表 1)

調査区北側の攪乱層の手前に沿って窪んでいる箇所にある。やや深く幅の広い形状である。埋土は上下 2 層に分かれ、下層が明黄褐色に近い色調、上層が浅黄色に近い色調である。出土した遺物は奈良時代の須恵器である。調査区北側に旧水路の大きな窪みがあり、この水路に流れ込む溝かも知れない。

溝 4 (図8,10、表 1)

調査区北東側に位置して、溝 3 と一連の遺構である。幅は広いが浅い。調査区北側に大きく窪んでいる水路があり、ここに流れ込む溝である。埋土は上層が黄灰色砂質土と明黄褐色粘砂質土の混合層、下層が黄灰色砂質土と明黄褐色粘質土の混合層である。

溝 5 (図8,10、写真8,9,17,18、表 1)

調査区中央付近に現れる。南西から北東方向に



写真 4 調査区中央部 (東より)



写真 5 調査区南半部 大溝 1 (北東より)



写真 6 大溝 1 断面 (部分) (北より)

横切っている。上流側の南側が途切れて消失している。大溝に沿って流れていたようだ。断面形状は下流側の①や②では幅に比較して深さがある。所が④では少し浅くなっている。この事から上流側に位置する南側から流れて来た溝が中世以降の開発時に削られて、無くなった可能性がある。南側の中位段丘の湧水地から導かれた水路か、あるいは中位段丘上の大溝1を堰き止めた小さな溜池から導かれたのかも知れない。埋土は上下に分かれている。上層が灰色粘質土層と明黄褐色粘質土層、下層が黄色粘質土層と灰色粗砂層である。この溝からサヌカイト剥片とともに奈良時代の須恵器や土師器破片が出土している。この溝5は奈良

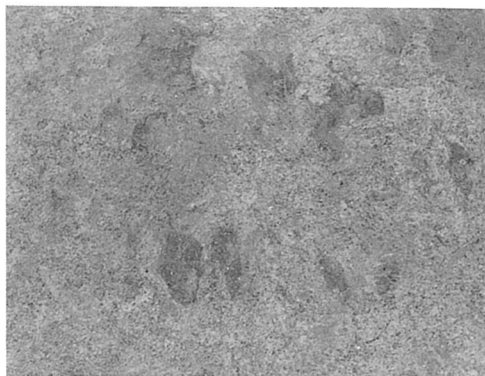


写真7 大溝1の底面に刻まれた偶蹄目類の足跡

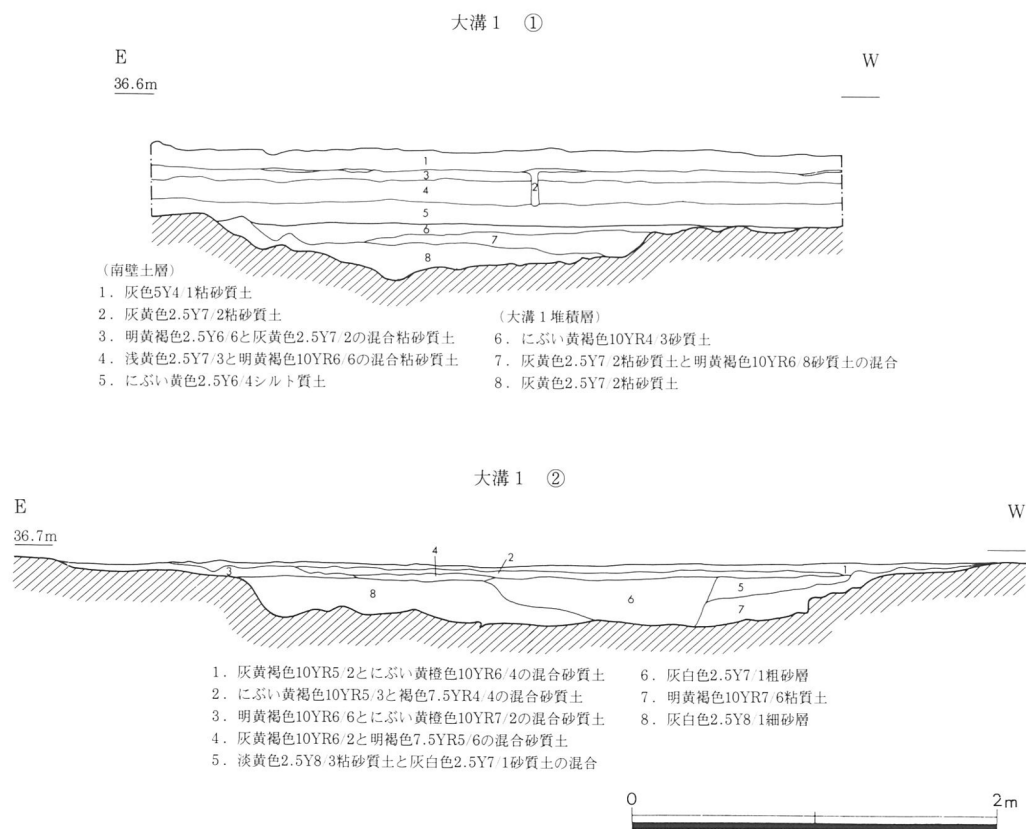


図9 丹上遺跡大溝1断面図 (1:40)

時代に使用されていた溝である。埋土下層に砂層がある事から水が流れていた時があり、灌漑用水を導いた溝と推測される。溝5と大溝1の関係は同時併存ではなく、多少時期差があって、溝5が埋没した上に大溝1の堆積層が一部分被っている。即ち大溝1が最終的に埋没したのは溝5より少し後のようだ。

溝6 (図8,10、表1)

調査区北東側で中央部に近い位置に単独で存在する。南東から北西方向を向く。埋土は明黄褐色砂質土と灰白色砂質土の混合層である。

溝7 (図8,10、表1)

調査区北東側で中央部に近い位置にある。この溝は少し幅が広く、南東から北西方向を向いている。埋土は明黄褐色粘質土と黄灰色粘砂質土の混合層である。

溝8 (図8,10、表1)

この溝は調査区中央付近にあり細長い形状である。埋土は浅黄色と灰黄色の粘砂質土層である。出土した遺物は奈良時代の土師器である。奈良時代の遺構の可能性がある。

溝9～19 (図8、写真12、表1)

調査区中央付近に細く浅い溝が集中して並んでいる。耕作時に鋤を使用した痕跡であろうか。調査区北半部では東西方向の浅い溝が数多く集まっている。一方、落込群は南西から北東方向を向いているものが多い。この事例から判断すると2方向の開発時か農耕時の際の痕跡が見られる。この内南西から北東方向は溝5や大溝1と平行にあり、古代の農業開発時の基本的な方向のわずかな痕跡を残しているのかも知れない。そして東西方向の溝の痕跡は周囲に広がる条里制の水田区画と合致しており、中世以降の条里制施行以降の農耕時の鋤か何かの耕作具の使用方向を残しているのかも知れない。

溝20 (図8,10、表1)

調査区西端にある。少し湾曲した遺構である。しっかりした遺構であるが短い。溝21も同様である。埋土は明黄褐色粘砂質土層で、下層に淡黄色粘砂質土層がある。下層は色調が薄くなる。遺物は出土しない。

溝21 (図8,10、表1)

調査区西端にある。東端は攪乱で削られている。埋土はにぶい黄色粘砂質土層で、下層ににぶ



写真8 大溝1 溝5 (北東より)

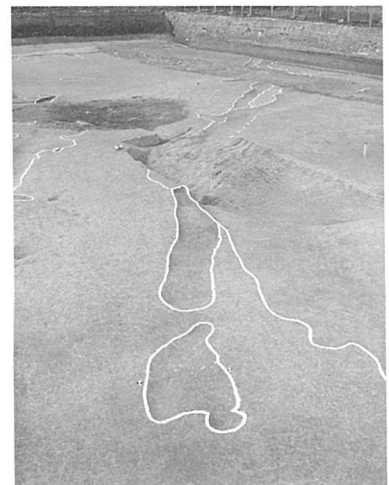


写真9 溝5 (南西より)

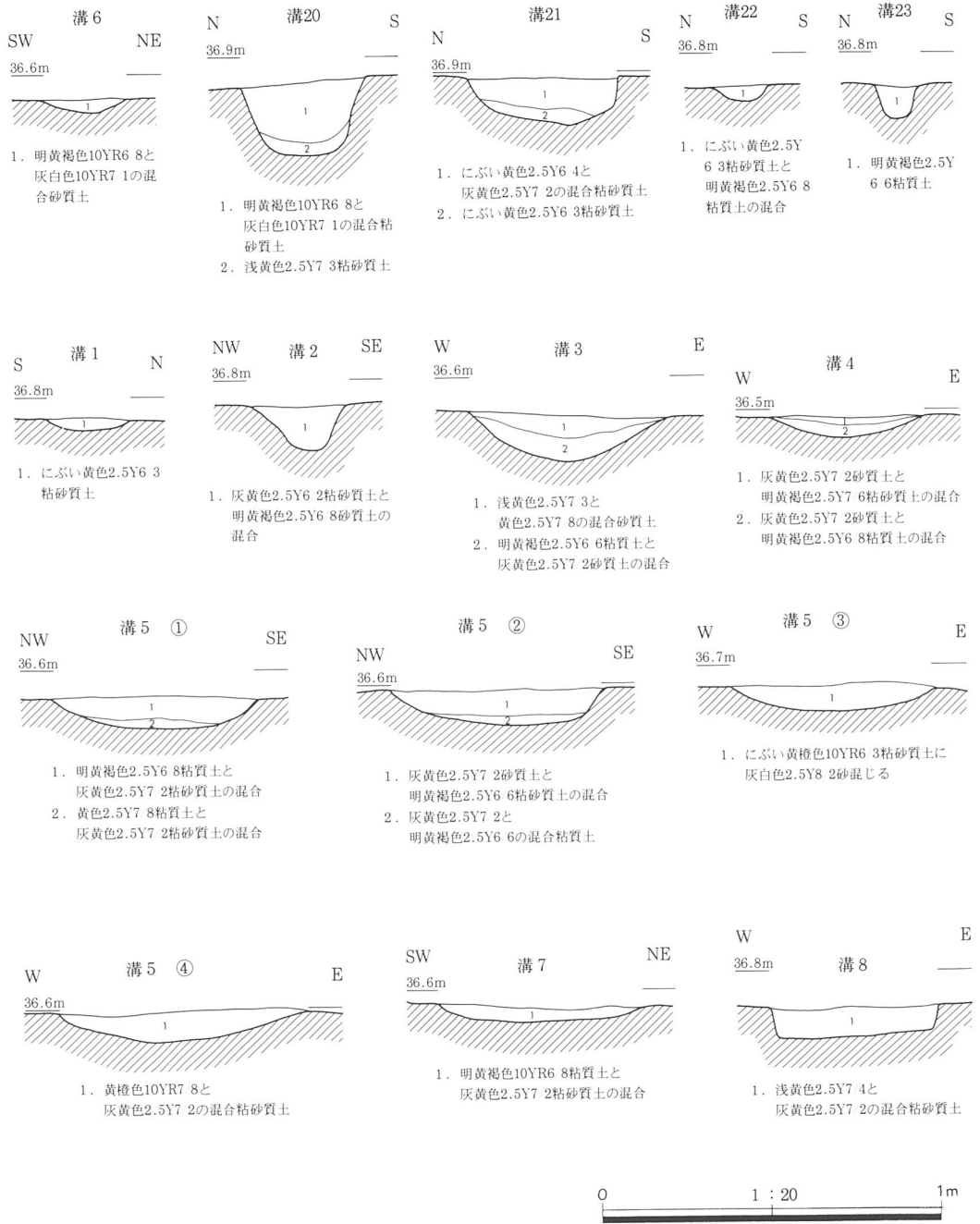


図10 丹上遺跡溝断面図 (1 : 20)

い黄色粘砂質土層がある。下層は色調が薄くなる。遺物は出土しない。

溝22 (図8,10、表1)

調査区中央少し北側に位置している。南側に溝23が並んでいる。にぶい黄色粘砂質土と明黄褐色粘質土の混合層である。

溝23 (図8,10、表1)

調査区中央付近に位置していて、落込1の東側にある。埋土は明黄褐色粘質土層である。

B. 井戸

井戸1 (図8,11、写真10,11,14,15、表1)

この井戸は長径2.36m、短径2.01m、深さは裁ち割り時に底部まで掘削できなかったが、4m以上を測る。埋土は上層がにぶい黄橙色シルト質層で、下層に灰白色砂層、明黄褐色粘質土層がある。野井戸として用いられていたらしい。出土した遺物は下層から瓦器碗片、上層から近世陶器が出土した。中世後半に井戸が掘られて以降近世に入るまで使用されていたらしい。

C. 土坑

土坑1

現代の攪乱である。

土坑2 (図8,11、表1)

この遺構は調査区北西隅に位置している。現代の攪乱が北側を削っている。深い遺構である。埋土はにぶい黄橙色粘質土層である。遺物は出土しなかった。

土坑3 (図8,11、表1)

調査区北側に位置している。埋土は黄褐色粘質土層である。遺物は出土しなかった。風倒木痕かも知れない。

土坑4 (図8,11、表1)

調査区北側中央付近に位置している。北側に落込15がある。埋土はにぶい黄色粘質土層である。遺物は出土しなかった。この遺構も風倒木痕の可能性がある。

土坑5 (図8,11、表1)

調査区北西側に位置している。浅く不整で方形に近い形である。隣に溝2がある。埋土はにぶい黄色粘砂質土層である。遺物は土器の小片が出土した。

土坑7 (図8,11、表1)

調査区中央西側に位置している。落込1の西側にある。上層はにぶい黄色砂質土層で小石混じり、下層はにぶい黄橙色に明黄褐色の混合粘砂質土で小石が混じる層である。

土坑9 (図8,11、表1)

調査区中央西側に位置して落込1の南側にある。埋土は明黄褐色と灰白色の混合粘質土層である。落込の一群として形成された可能性がある。

土坑10 (図8,11、表1)

調査区西側中央に位置している。落込3の東側にある。埋土は明黄褐色と灰白色の混合粘砂質土層である。やや長い形状である。この遺構も落込の一群として形成された可能性がある。

土坑11 (図8,11、表1)

調査区中央で、土坑14の西側に位置している。埋土はにぶい黄橙色のまだらな模様を示した粘砂質土層である。

土坑12 (図8,11、表1)

調査区中央の溝8の北側に接している。埋土は明黄褐色と灰黄色粘質土の混合層である。

土坑13 (図8,11、表1)

調査区中央に位置して、溝8の西側に接している。埋土は明黄褐色と灰黄色粘質土の混合層である。

土坑14 (図8,11、表1)

調査区中央に位置して、溝8に接して西側に伸びている。埋土は明黄褐色粘質土と灰白色粘砂質土の混合層である。

土坑15 (図8,11、表1)

調査区中央東側に位置している。溝5の少し西側にある。埋土は明黄褐色粘質土と灰黄色粘砂質土の混合層である。

土坑16 (図8,12、写真13、表1)

調査区南西隅に位置している。土坑17に接している。埋土は上層はにぶい黄橙色粘質土層で、下層に灰白色粘砂質土層がある。遺物は出土しなかった。

土坑17 (図8,12、写真13、表1)

調査区南西隅に位置している。土坑18に切られている。浅い遺構である。埋土は黄色と灰黄色の混合粘砂質土層である。出土した遺物は奈良時代の須恵器や中世では瓦器碗そして鉾津や時期不明の丸瓦片が出土している。この遺構は中世の可能性はある。

土坑18 (図8,12、写真13、表1)

調査区南西隅に位置していて、長方形の遺構である。長さ1.24m、幅0.78m、深さ0.45mである。埋土は上層に黄色粘砂質土層、下層に明黄褐色粘砂質土層、にぶい黄橙色砂質土層、黄橙色粘土層がある。埋土は数層に分かれ、長方形の形態である事と掘方が深く下がる事から土壌墓の可能性も考えたが、土師器や須恵器の完形品やそれに近い形の土器が出土しない事や埋土の

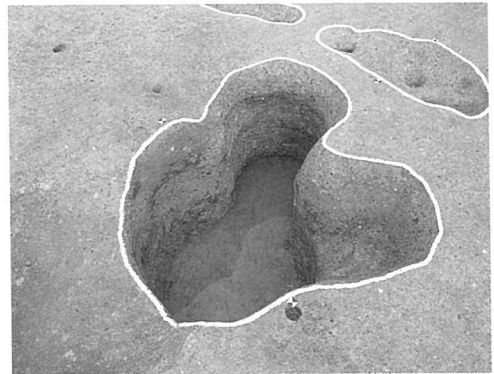


写真10 井戸1 落込4 (西より)



写真11 井戸1内堆積層 (西より)

層が自然に埋没したような層序を示す事などから、土壌墓と違う可能性がある。この遺構からは奈良時代の須恵器そして中世かと思われる瓦破片などが出土している。この遺構は中世と考えられる。

土坑19 (図8, 13, 表1)

調査区南西側隅に位置している。東西方向に伸びる遺構である。埋土は黄色と灰黄色の混合砂質土層である。

土坑22 (図8, 13, 写真12, 表1)

調査区中央付近に位置して、南側に落込11がある。埋土は灰黄色粘砂質土層である。遺物は出土しなかった。

土坑23 (図8, 13, 表1)

調査区中央少し西北側で、落込1の北側に接している。埋土は灰黄色と明黄褐色の混合砂質土層である。

土坑24 (図8, 写真19, 表1)

調査区南側の大溝1の底面で検出された、長径1.05m、短径0.95m、深さ0.36mを測る円形に近い遺構である。この中から非常に風化して時期がはっきりしない難しい遺物が出土している(写真19)。この土器の胎土は砂粒が多い事や焼成が非常に柔らかい特徴がある。そしてこの土器は縄紋か弥生時代に中位段丘上で人々が生活していた事を示す資料である。そして中位段丘上面に数多く出土している石器や剥片資料の大半はこの土器の時代の人々が作り出した可能性がある。しかし土器から年代を推測する事は難しい。

D. 落込

落込1 (図8, 15, 写真14, 表1)

調査区中央少し北側にある。南北に細長く北側では2つに分岐している。中央部では広く浅い遺構である。埋土は上層が灰黄色粘砂質土層で、下層に暗オリーブ色層がある。下層は色調が薄くなる。遺物は出土しなかった。床土層が



写真12 土坑22 落込5, 11
溝9~19 (西より)



写真13 落込3, 4, 井戸1
土坑16, 17, 18 (南西より)



写真14 落込1, 2, 3, 4
井戸1 (南西より)

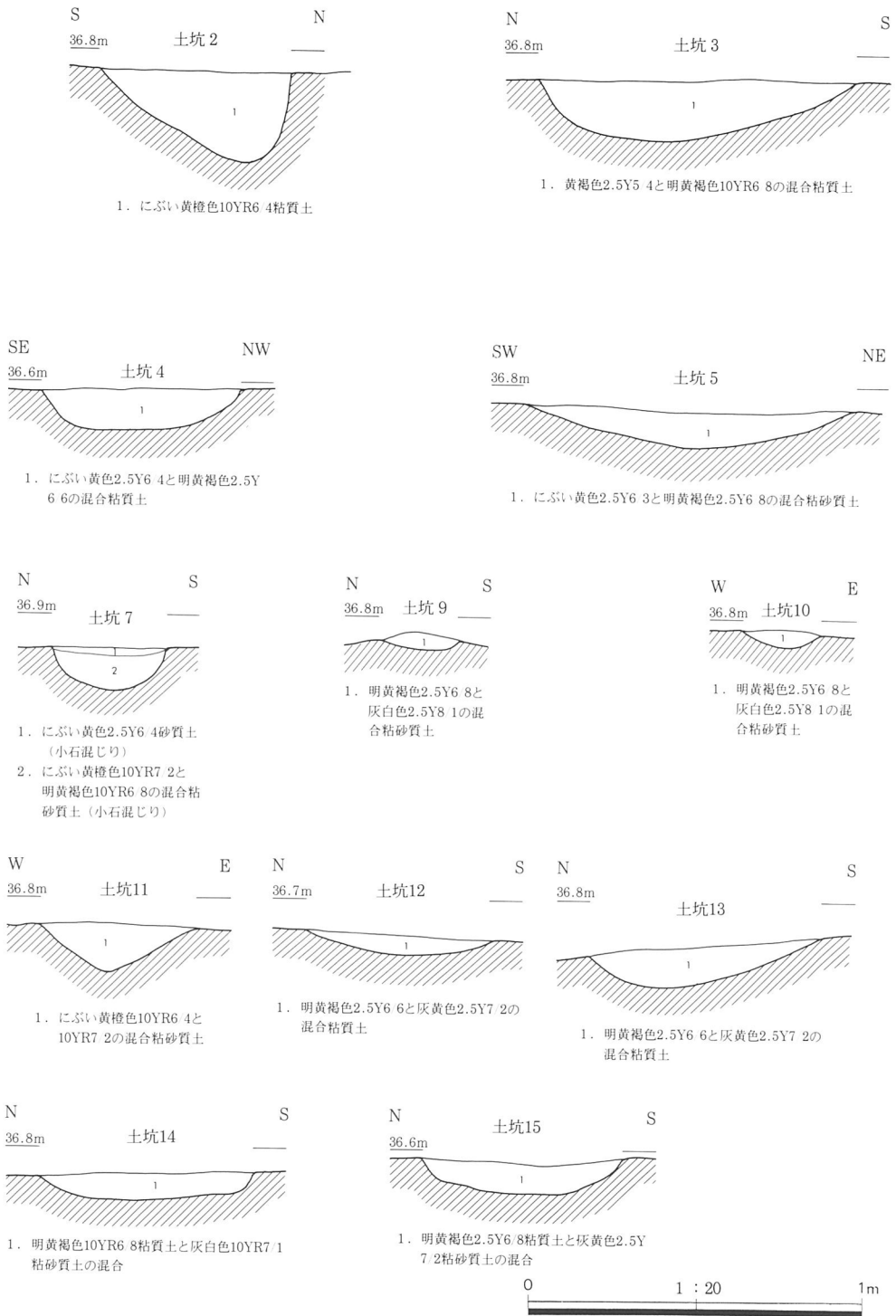


図11 丹上遺跡土坑断面図 (1 : 20)

深く掘り下げられていたような堆積層である。

落込 1 から落込 4 までは浅い遺構が多い。

落込 2 (図 8, 15、写真14, 15、表 1)

調査区北西側にある。落込 1 の南側に接している。埋土は明緑灰色粘砂質土と灰色砂質土層の混合層である。出土した遺物は中世の瓦器碗である。中世に作られた遺構である。

落込 3 (図 8, 15、写真13, 14, 15、表 1)

調査区西側中央にあり、落込 2 と 4 の間に位置している。埋土はにぶい黄色粘砂質土と黄褐色砂質土の混合層である。

落込 4 (図 8, 15、写真10, 13, 14, 15、表 1)

調査区の西側に寄った所にある。井戸 1 の東側にある。埋土は灰黄色粘質土層である。出土した遺物は時期を推定できない須恵器の甕の破片である。

落込 5 (図 8, 15、写真12, 16、表 1)

調査区中央に位置している。埋土は上層がにぶい黄色粘砂質土に灰白色砂が混じる層である。下層が灰黄色と明黄褐色のまだら模様の粘砂質土層である。落込の中央付近に溝 5 と平行な溝状の深い部分がある。落込の断面形状ではこの深い部分と周囲の浅い部分とは区別できなかった。深い部分は元は連続した遺構で、後世に削られて分離した形で溝 8、落込 5、落込 7 として寸断されて検出されているとも考えられる。落込 7 は下層の埋土が異なっているが、下層に別の遺構があって重複している可能性があり、上層の埋土が類似している事から連続した遺構の可能性が

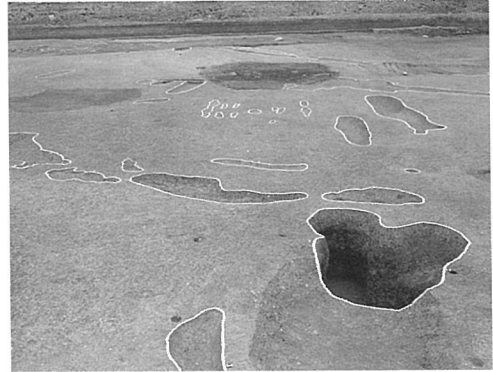


写真15 落込 2, 3, 4, 11、井戸 1
土坑22 (西より)

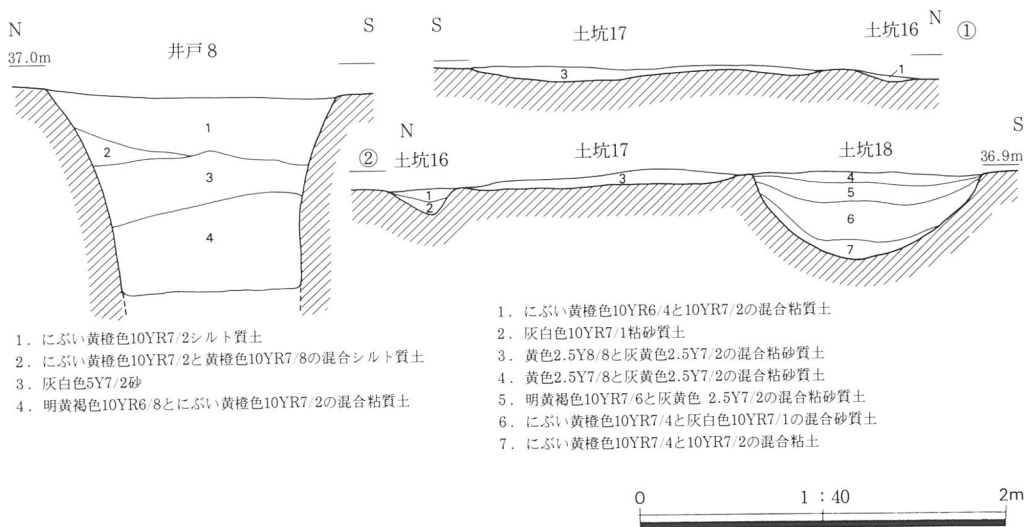


図12 丹上遺跡土坑、井戸断面図 (1 : 40)

考えられる。この遺構から奈良時代の土師器が出土している。しかし他の状況から奈良時代と即断するのは避けたい。中世の開発は奈良時代の遺構を削り、ここから出た土器が中世の床土層に入った可能性も考えられるからである。

落込 6 (図 8, 15, 写真16, 17, 表 1)

調査区南西側に位置している。落込 7 の北側に位置している。埋土は明黄褐色と灰黄色のまだら模様の粘砂質土層である。この遺構からは時期不明の土師器の破片が出土している。

落込 7 (図 8, 16, 写真16, 17, 表 1)

調査区南西側に位置している。幅広いが南側に細く伸びている。埋土は複雑である。この遺構は上層に落込があり、下層に違った遺構である土坑が重複していたため、深くなっている。上層に明黄褐色粘砂質土層やにぶい褐色などがある。下層の土坑は暗灰紫色を示す。この遺構の上層から奈良時代の須恵器が出土している事から奈良時代の可能性がある。下層の土坑からは遺物が出土していない。この土坑は番号を付けていないけれども、埋土の土色が非常に土坑24と似ている事から、土坑24と似た時期の遺構であった可能性がある。

落込 8 (図8, 15, 写真16, 17, 表 1)

調査区南西隅に位置している。埋土は明黄褐色と灰黄色のまだら模様の粘砂質土層である。



写真16 落込 5, 6, 7, 8, 9, 13 (南西より)



写真17 落込 6, 7, 8, 9, 12 溝 5 (南西より)

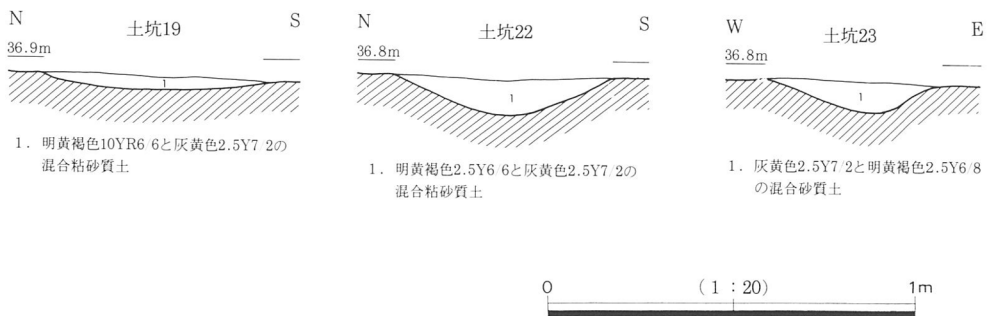


図13 丹上遺跡土坑断面図 (1:20)

落込 9 (図8、写真16、17、表1)

調査区南西隅に位置している。埋土は黄橙色と灰色のまだら模様の粘砂質土層である。

落込10 (図8、15、表1)

調査区中央付近に位置している。やや丸い遺構である。埋土は明黄褐色粘質土と灰黄色粘質土の混合層である。

落込11 (図8、15、写真12、15、表1)

調査区中央付近にある。埋土は明黄褐色粘砂質土層である。

落込12 (図8、15、写真17、18、表1)

調査区南西側にある。落込7の東側、溝5の南側に位置している。埋土は上層が明黄褐色と灰黄色のまだら模様の粘砂質土層、下層が灰黄褐色の粘砂質土層である。

落込13 (図8、15、写真16、18、表1)

調査区南西側に位置して、落込7の東側に接している。埋土は浅黄色砂質土層である。

落込14 (図8、15、表1)

調査区中央少し北側に位置している。落込1の北東側に接している。埋土は黄褐色粘質土層である。

落込15 (図8、16、表1)

調査区北側で部分的に旧水路の肩部が何箇所か検出されたもので、大半が攪乱を受けている。本来東西方向に流れていたこの旧水路は、大阪中央環状線建設時に移設されており、その際に大規模に破壊を受けたものである。この旧水路に下る部分の当時の表土層と思われるのが落込15である。この一部分が寸断されて見えている。埋土は上層が黄灰色と明黄褐色の混合粘砂質土層、下層が黄灰色と明黄褐色の混合粘質土層である。出土した遺物は近世の染付破片である。

E. ピット

調査区内にP-1~P-10までピットを検出した。建物に復元できたピットは無い。ピットはすべて性格がよく分からない。



写真18 落込12、13 溝5 (南西より)

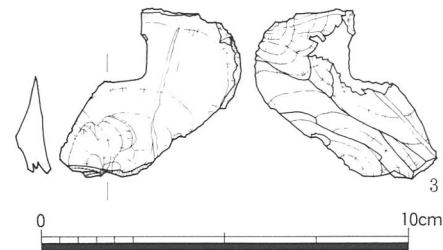


図14 丹上遺跡大溝1出土遺物 (1:2 1:4)

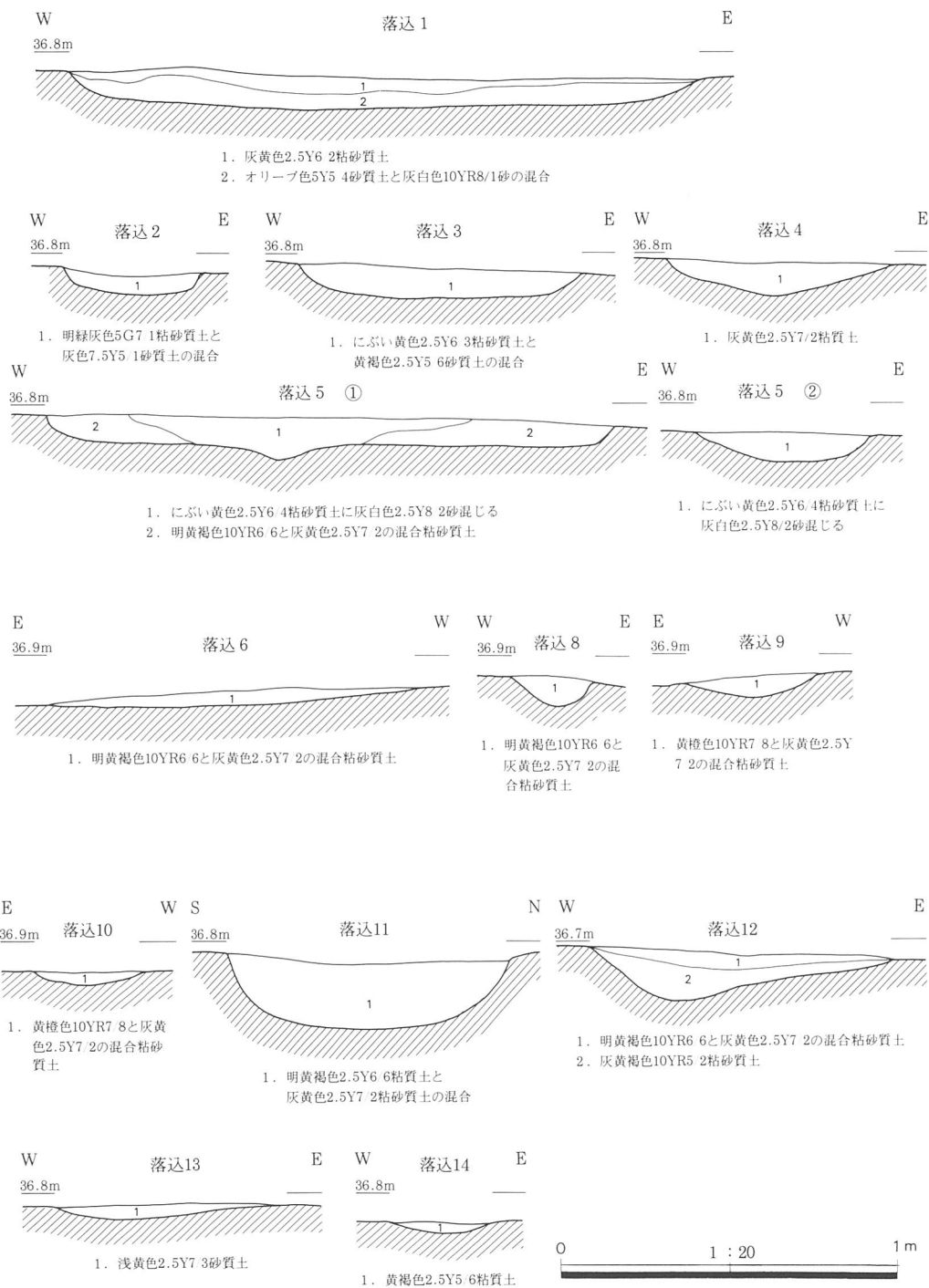


図15 丹上遺跡落込断面図 (1 : 20)

4) 遺物

A. 溝

大溝 1 (図14)

溝の中からサヌカイト横長剥片(3)、古墳時代の須恵器の甕、坏身、坏蓋、土師器の坏や、奈良時代の須恵器では壺、坏蓋、甕、土師器の甕(2)、高杯、とりべ状土器、そして平安時代では黒色土器片や中世の瓦器碗などが出土している。大溝は奈良時代終末頃にはほぼ埋没するが、その上面に残された浅い窪地状に残った上に堆積した中から出土しているのが、黒色土器や瓦器碗と理解される。

溝 3

この遺構から須恵器の坏身、甕が出土している。

溝 5

この遺構から奈良時代では須恵器の坏蓋、壺、坏蓋と壺の融着した破片資料、土師器破片、サ

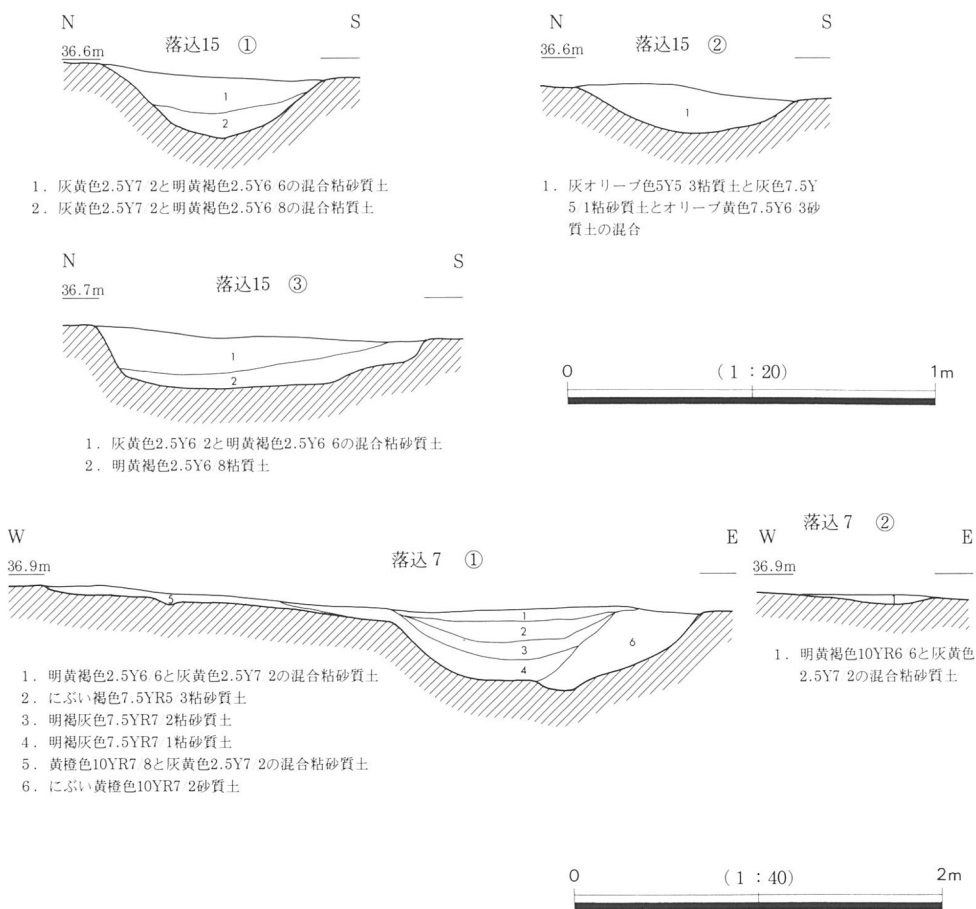


図16 丹上遺跡落込断面図 (1 : 20、1 : 40)

ヌカイト剥片が出土している。須恵器の融着した破片資料は使用可能な「製品」として流通できるものでは無く、廃棄物として捨てられたと考えられるもので、近くに須恵器窯が存在して、須恵器を焼成していた事を示す。この窯は未知の須恵器窯である。

溝 8

この遺構から奈良時代の土師器、鉢口縁部が出土している。この遺構は奈良時代であるらしい。上記以外の溝からは遺物が出土していない。

B. 井戸

井戸 1 (図17)

遺構内から古墳時代の須恵器坏蓋 (4)、坏身で底部未調整で陶邑編年Ⅱ型式4～5段階かと思われる資料や奈良時代の須恵器で甕や坏蓋、そして中世の羽釜や青磁、瓦器椀高台部 (5)、近世陶器の椀で三島手らしいもの (7)、天目茶碗 (6) などが出土している。この井戸は中世に掘られて、近世前半期に埋没した井戸と考えられる。

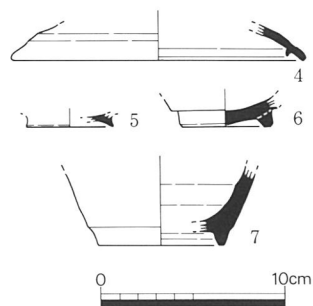


図17 丹上遺跡井戸 1
出土遺物 (1 : 4)

C. 土坑

土坑 5

土器片が出土しているが時期は推測できない。

土坑17

奈良時代の須恵器の甕、中世の瓦器椀や時期不明の鉾滓や丸瓦片が出土している。この遺構は中世の可能性がある。

土坑18

奈良時代の須恵器の壺、中世の瓦破片が出土している。この遺構も中世と考えられる。

土坑24

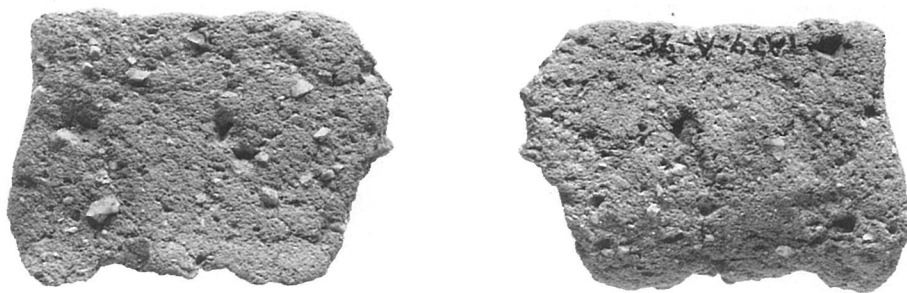


写真19 土坑24出土遺物 (左側 外側、右側 内面)

土坑内から表面が磨耗して時期を推定するのに困難な資料が出土している。口縁部付近の破片と推測されて、括れた体部上半から外側に口縁部が反っている形態である。表面は剝離していて文様は全く見えない。胎土は荒く、砂粒を多く含んでいて淡い灰茶色である。この資料は縄紋時代人かあるいは弥生時代人が判断がつかないが、いずれかの時代の人々が中位段丘上面で生活していた事を示す資料となる。そして中位段丘上面に数多く出土している石器や石器剥片資料の大半はこの土器を使用した時代の人々のなせるわざであった事が推測されよう。

D. 落込

落込 2

この遺構から中世の瓦器碗破片が出土している。中世に作られた遺構である。

落込 4

この遺構から時期不明の須恵器の甕の体部破片が出土している。この甕体部資料から時期の決定は難しい。中世かその前代の平安時代まで使用されていた須恵器甕であるのかも知れない。

落込 5

この遺構から奈良時代の土師器でミニチュアの甕模造品である円錐状の形態を逆転した土器が出土している。この資料から奈良時代でも後半期を考えたい。

落込 6

遺構内から時期不明の土師器の破片が出土している。

落込 7

遺構の上層から奈良時代の須恵器、坏身、甕が出土している事から奈良時代の可能性がある。

落込15

遺構から近世染付の破片が出土している。

E. 床土層 (図18)

床土層からは次の遺物が出土している。古墳時代では須恵器の坏蓋、甕、壺、鉢、甗と共に土師器の甕、形象埴輪の破片でどこの部位かわからない物、円筒埴輪が出土している。円筒埴輪は直径30cm前後を測るもので、幅約3cmを測る口縁部貼り付け凸帯を持っており、この埴輪の下部の凸帯は基底部幅1.8cm、上端部幅1.3cm、高さ0.4cmで、上端面は平坦で、稜線は突出しない形態を示している(22・24)。奈良時代では須恵器の坏身(12~15)、坏蓋(8~11)、壺、甕(18、19)、皿、瓶子(17)、鉢や土師器では坏、皿(16)、甕、羽釜、把手付き鉢(20)、製塩土器がある。平安時代では黒色土器の碗で高台付きのものがある。中世では土師質の羽釜、瓦器碗、瓦質小皿、青磁、丸瓦、時期不明であるが恐らくこの頃と思われる鉾滓、近世の染付、瓦片、丸瓦、近世陶器の皿や土師質の泥面子等が出土している。以上のように様々な種類の土器が出土している。

以上の資料を分析すると次のような事が推測できそうである。

古墳時代では至近距離に古墳群の存在を窺わせる埴輪資料がある。円筒埴輪破片が約10点出土している。そしてこの頃の須恵器も出土している。須恵器、坏身、坏蓋、甕、壺、甗と言った通

常の古墳に見られる資料である。そしてこの古墳は恐らくは横穴式石室ではなくて、木棺直葬であったと考えられる。なぜならこれまでの調査時や今回からも石室を構成する石材らしいものが全く発見されていないからである。そして墳丘の残った部分にも石室の石材を取り除いた窪みが概要報告書に記載されていない。円筒埴輪は中型の埴輪で凸帯2条から3条から4～5条を持ったと考えられるもので、体部外面調整は縦ハケで10/cmを測る細かなものである。そして凸帯形状はやや幅の広いもので上端部は平坦で稜線が突出していない。そして凸帯上面にはハケ状工具の痕跡を残している。時期的には6世紀前半頃が考えられるのではないだろうか。

これまで調査された奈良時代の成果は南側に広がる律令期の掘立柱建物群が判明している。恐らく奈良時代の遺物の大半はこの建物群に関連して使用されていたものと推測される。すると掘立柱建物の最終末は黒色土器の頃までこれらの建物が機能し続けていた可能性も考えられる。開始期についてはよく分からない。

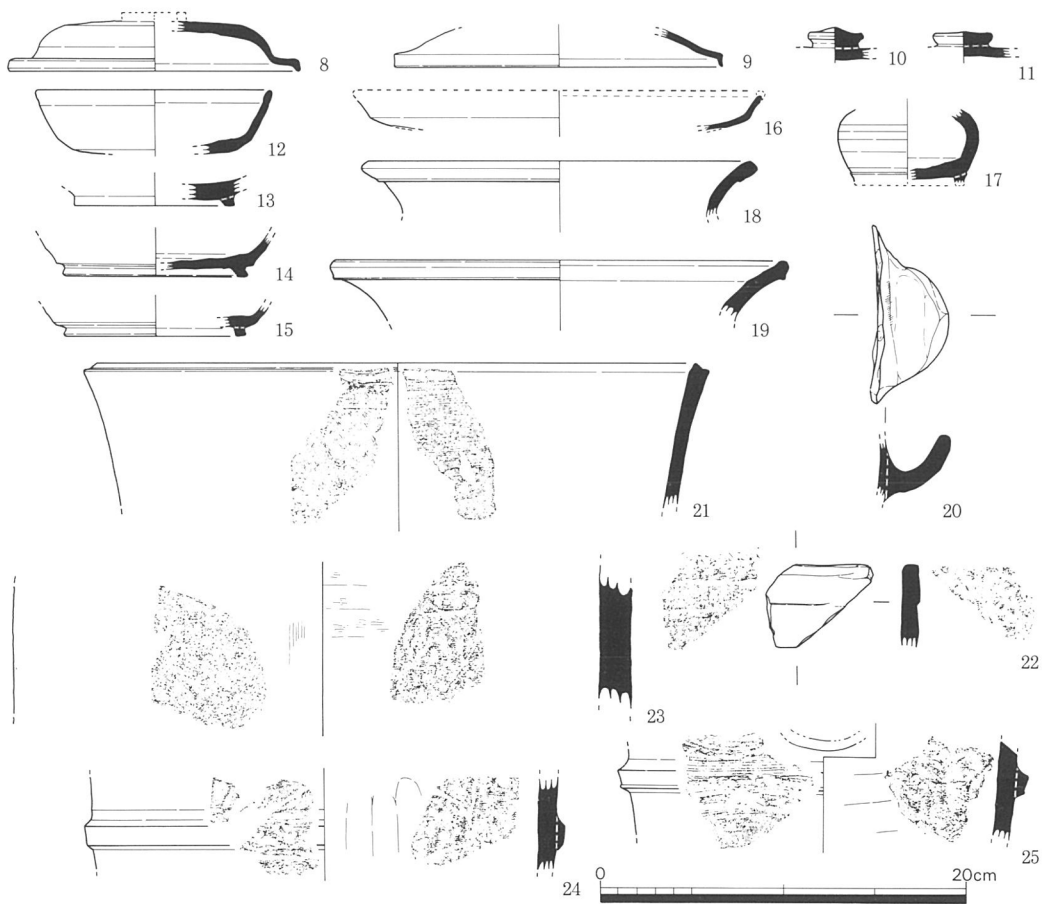


図18 丹上遺跡出土遺物（1：4）

第2節 観音寺遺跡

1) 調査の概要 (図20、21)

今回の調査区に隣接した東側の第6調査区(G地区)で、中央に延びる南北方向の溝1や溝3より東側に掘立柱建物群が検出されている。今回は掘立柱建物が見られない。南北の溝を境にして西側が集落外になる。東側で調査された溝の続きが今回の調査で検出されている。今回の調査区内は北半部と南半部で遺構の性格が変わる。両者は中央付近を斜めに横切る大溝で区切られる。大溝より北側は細い溝や柱穴が見られる。これらの区域を北半部と呼ぶ。一方大溝を含んで南側では中世の堆積層があり、落込がある。高さも少し北側より低くなる。この区域を南半部と呼ぶ。

2) 基本層序 (図19)

A. I層

旧耕作土層がI層である。この上に盛土が約1.5~2.0mの厚さで覆って現地表面の高さとなる。I層は調査区の大半の区域で中央環状線建設時に削り取られている。

B. II層

床土がII層である。この層は2枚に分層できる。II-1、II-2層である。この2層の厚さは両者とも最大10cmである。II層は北半部に堆積していないが南半部には堆積している。II層の細分された各層の形成過程は丹上遺跡で述べたのと同様に嵩上げ作業に伴うと考えられる。すなわち色調の違いは、水田の嵩上げが2度かあるいはそれ以上の回数にわたって行われた痕跡と考えられる。この堆積層は、南側で調査した丹上遺跡(その9)でも見られる。

II層の細分された各層についての分層発掘は行っていない。II層の細分された層を分けて発掘すれば、堆積層の各層の年代を推定しえる可能性もあったが時間の関係で省略した。II層内から古墳時代の須恵器、土師器、奈良時代の須恵器、土師器、中世の瓦質土器、須恵質土器、土師器、近世の土器類が出土している。調査区南部には相当土を盛り上げている部分がある。新池の堤を

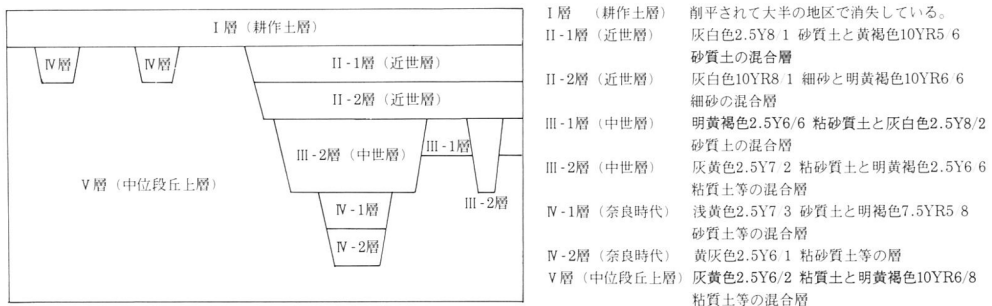


図19 観音寺遺跡基本層序模式図

一部分横切っていたのかも知れない。この堆積層中から近世の遺物が出土している。

C. III層

南半部に見られる層である。全体的に北半部に比べると低いいためか、中世に堆積した層がある。上層をIII-1層と呼ぶ。この下層に大溝上部部分が窪んでいて、ここに堆積した層がある。これがIII-2層である。落込A、B、CはIII-1層が堆積した後に形成される。III-1層は厚さ最大約35cm、III-2層は最大55cmの厚さがある。この層の下部には粘土系の堆積層が見られる。下の層はV層の中位段丘層であるが、この2つの層の境に凹凸が数多く見られる。人や動物が歩き回った足跡の痕跡が残っているようだ。この事からここは湿地状の澱んだ窪みであったのかも知れない。

D. IV層

奈良時代の遺構内埋土がIV層である。この層も大溝堆積層を見るとIV-1層とIV-2層に分層できそうである。しかしこの層の違いが時期差として認められるかは分からない。層厚はIV-1層が最大約65cm、IV-2層は最大約40cmを測る。色調は暗灰色などの濃い色調が少なく、薄い色調が多く見られる。大溝のほかに溝や柱掘方内にもIV層がある。これらは細かな分層を行っていない。柱掘方内も色調は灰色系で薄い色を示している。有機物の廃棄が以外と少なかった可能性がある。

E. V層

中位段丘層最上層である。黄褐色系の色調である。黄褐色系の層中に石器類が出土する可能性が考えられたので、約70mの長さで南半部に断ち割りを入れた。この結果旧石器の出土は無く、また下層に遺構面が無い事が明らかになった。

3) 遺構 (図20, 21)

当遺跡で検出した遺構は大溝、溝、落込、ピットである。

A. 溝

大溝1 (図20, 21, 22、写真19, 20, 21, 22、表2)

溝は上部、中部、下部と3回にわたって次第に埋没している。

大溝の上部構造は床土層から約0.8mの深さを測り、溝幅は斜めになるので正確には測れないが、約15mを測る。中部は幅約5m、深さ0.5mを測り、下部は幅が1.0m、深さ0.4mを測る (写真20)。溝の上部は浅く緩やかに傾斜して、幅の広い構造を示している (写真20)。溝の上部の埋土は灰黄色シルト層や黄灰色粘砂質土層と灰白色シルト層の混合層や灰白色と明赤褐色の混合シルト層などがある。さらにこの下の中部の埋土は灰黄色と赤褐色の混合粘質土層や灰白色シルト層からなる層がある。上部の幅の中部が中世に埋没したらしい。埋土は灰色と灰オリーブ色の粘砂質土層等からなる。底に灰色粘土層を踏み抜いて黄色粘土層に足跡の痕跡を残している。最下層には暗灰色系の粘土層が横に広く堆積して、この上層には中位段丘最上層堆積層とほとんど区別のできない黄灰色系の粘質土層が堆積している。下層が堆積した後に周囲の中位段丘層が堆積し

て溝の断面が暗灰色系の粘土層が異様に横に広がった形で入り込んでいるように見える(写真21)。断面観察で子細に堆積層を観察したが、はっきりとした溝の掘り方の形状を認識する事はできなかった。堆積層がわずかに砂質土化するラインをもって一応溝を掘り下げた跡と理解しているが、自信は全く無い。再度埋没してこれほどまでに良く似た土質で埋没するのであろうか。今一つ合点がゆかない。図22は大溝の西側断面図で溝を約30度の角度で切った断面図である。従って本来の溝幅の約2倍に引き延ばされた断面図である。ここで溝堆積層の32層が下層側に入り込み、この上層に30層や20層、17層が被る。ここで17層と左側に隣接する36層、37層との違いは少し砂質が多いかそうでないかだけである。この縦の線は無理に入れている。作図すると一見溝状に見えてしまうが、実際はこの線の両側の違いはほとんどわずかである。この層から瓦器碗や瓦質甕が出土している。中部の堆積層、下部の堆積層から古墳時代の須恵器、土師器、奈良時代の土師器や須恵器が出土している(写真22)。上部堆積層から古墳時代の須恵器、円筒埴輪、奈良時代の須恵器、土師器、中世の瓦質土器、土師器類、中世陶器が出土している。

大溝下部は奈良時代にはすでに使用されている事が分かる。そして奈良時代後半期には下部の一部が埋没し始めている事が出土遺物から推測される。大溝中部までは奈良時代遺物を含んでいるだけで、この時代の最終末の頃にすでに殆ど埋没して、僅かに窪んだ状態にあった事が推測される。黒色土器が含まれていない事から奈良時代終末期には埋没していた可能性も考えられよう。その後は中世まで窪んでいて湿地化していた時期がありそうである。窪みの底部に人かあるいは偶蹄目類の足跡かわからない跡が数多く認められる。この湿地状の上に堆積した層の中から、中世の遺物が数多く出土している。この頃に溝中層が相当埋没



写真20 大溝1、溝63(南東より)



写真21 大溝1断面 全景(南より)



写真22 大溝1断面(拡大)(南より)

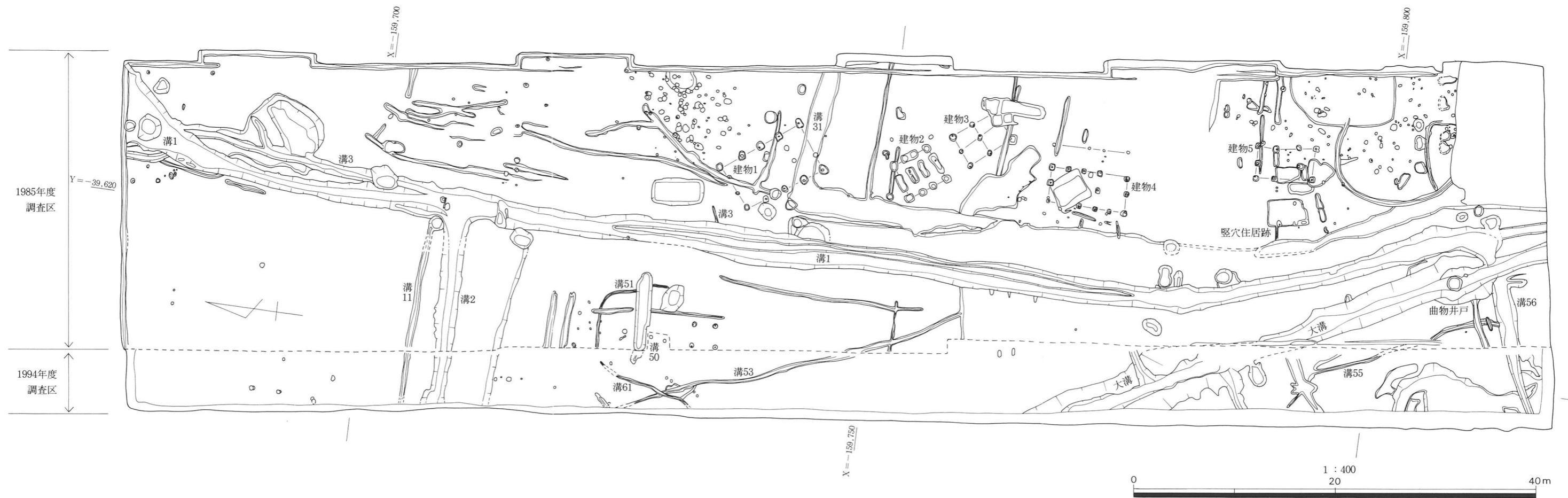


図20 観音寺遺跡G地区遺構全体図（1：400）

観音寺遺跡（その4）

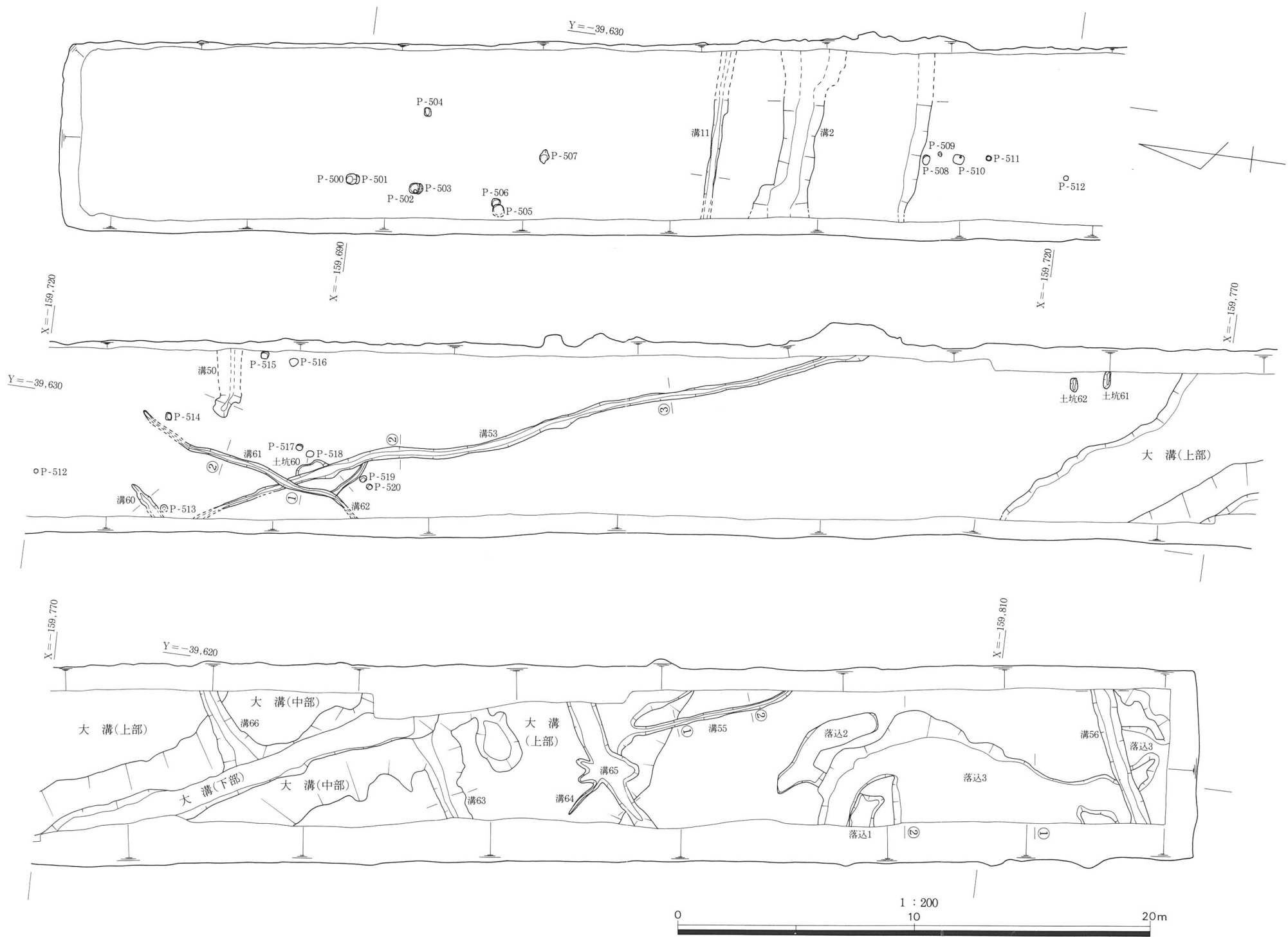


图21 观音寺遺跡調査区平面図 (1 : 200)

溝2 下層 (図20, 21, 23、写真24, 25、表2)

この溝は幅が広く浅い溝である。北端は溝2 上層に削られている。この溝から奈良時代の須恵器、中世の土師器、瓦質土器、中世陶器類、近世陶器類が出土している。この溝は中世から近世にかけて使用されて、近世前半期に廃絶して、北側へ移動して幅の狭い溝2 上層に移る。溝2 下層から溝2 上層へと継続して使用されて、機能を引き継いでいると考えられる。

溝11 (図20, 21, 24、写真24, 26、表2)

東側の調査で検出されていたもので、今回の調査区では引き続いて西に延びている。この遺構から奈良時代の須恵器や中世の土師器、瓦器碗などが出土している。この遺構は中世の遺構と推定される。

溝53 (図20, 21, 24、写真27、表2)

溝53は幅が狭く浅くて長い溝で、溝61と断面形状がほぼ同じである。溝53は溝61に切られていて、前後関係がある。溝53は南南東から北北西に流れるが、溝61は南南西から北北東に流れている。形態や規模は似ているが、どのような遺構と関連性を持っていたかはそれぞれ違っていると思われる。溝61と溝53の埋土は非常に似ている。2つの溝は時期的に近い可能性が高い。この溝から奈良時代の須恵器、土師器が出土している。

溝55 (図20, 21, 24、写真28、表2)

この溝は調査区南東側で南から続く13GトレンチのSD-55に接続している。幅の狭い、長い溝である。

溝56 (図20, 21, 24、写真29, 30, 37、表2)

この遺構は調査区南端にある。溝は上下2つの時期の異なった溝が重複している。府道中央環状線建設に着手するまで使用されていた溝が上部の溝で3層に別れる。溝の中に杭が打たれている。この溝から奈良時代の須恵器や中世と思われる瓦類が出土している。下層の古い溝は上層とほぼ同じ位置にあって重複している。奈良時代から中世までの遺物が出土している。これらの遺物は恐らく中世に使用されていた溝に奈良時代の遺物が混入したと考えられる。

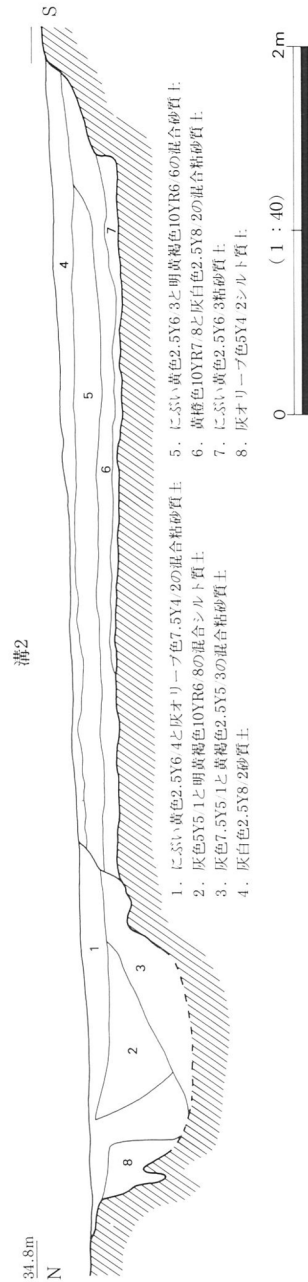


図23 観音寺遺跡溝2 断面図 (1 : 40)

溝60 (図20, 21、表2)

調査区中央やや北側の西端に位置している。この遺構から奈良時代の土師器、須恵器が出土している。

溝61 (図20, 21、写真27, 31, 32、表2)

この遺構は東側調査区から続く溝で、底部はU字状である。東側の調査区にある溝51と位置的に連続していて、つながっていた可能性がある。今回の調査区ではこの溝は南西から北東方向に流れている。もし両溝がつながっていたと理解すると、この溝は東側の前回の調査区では南側から伸びて次第に曲線を描いてU字状に西に曲がり、今回の調査区では南西方向に流れている。U字状に囲まれた中に掘立柱建物らしい柱掘方が幾つか調査されている。この柱掘方は東側部分の概要報告書は建物として復元していないが、柱間の間隔が均等な箇所もあって、細長い建物が建てられていて、建物を取り囲んでいた溝であった可能性がある。溝から奈良時代の須恵器が出土していてこの遺構も奈良時代と考えられる。

溝63 (図20, 21, 24、写真20, 33, 34、表2)

この溝は西南西から大溝に注ぎ込む溝である。大溝下部が埋没した跡の大溝中部が窪んでいた所に注ぎ込む溝である。この溝から古墳時代の須恵器、奈良時代の須恵器、土師器、中世では土師器、瓦質土器などが出土している。この埋土中から中世の遺物が出土している事から判断すると、中世かその頃に大溝下部が埋没した跡の大溝中部に浅い窪みが残っており、浅い窪みに注ぎ込むのがこの溝63である。この溝や溝65、溝66も同様な機能を果たしている溝である。

溝64 (図20, 21、写真34, 35、表2)

この溝は細くて浅い溝で、溝65に注ぎ込む。



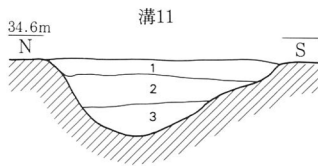
写真23 大溝1 底部
遺物出土状況 (西より)



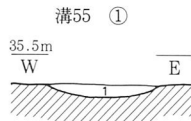
写真24 溝2, 11 (東より)



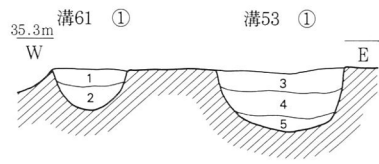
写真25 溝2 上層断面 (西より)



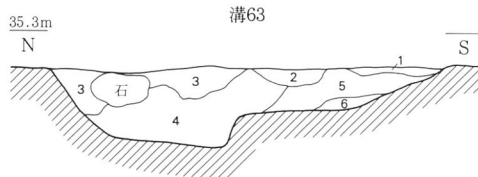
1. 明黄褐色2.5Y6/8 砂質土
2. 浅黄色2.5Y7/4粘砂質土
3. にぶい黄色2.5Y6/4 粘砂質土



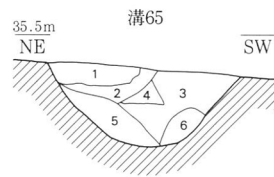
1. 明黄褐色2.5Y6 6粘質土とにぶい黄色2.5Y6 3砂質土の混合



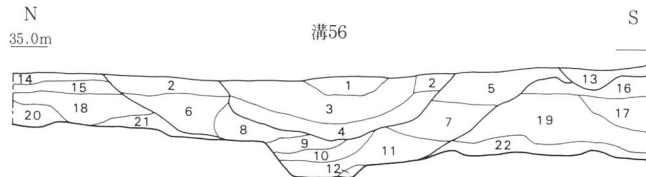
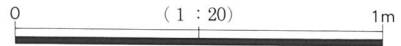
1. 黄色2.5Y8 6と浅黄色2.5Y7 3の混合粘砂質土
2. 灰白色5Y7 2粘砂質土に明黄褐色10YR6 8粘砂質土の斑点あり
3. 淡黄色5Y8 3と黄褐色10YR7 8の混合粘砂質土
4. 黄褐色10YR7 8シルト質土と灰白色5Y7 1粘砂質土の混合
5. 黄褐色10YR7 8粘質土と明緑灰色5G7 1粘土の混合



1. 灰黄色2.5Y6 2粘砂質土
2. 緑灰色5G6 1粘砂質土
3. 灰黄色2.5Y6 2と黄色2.5Y7 8の混合粘砂質土
4. 灰黄色2.5Y7 2粗砂
5. 灰オリブ色5Y6 2粘質土と赤褐色5YR4 8粘砂質土の混合
6. 黄灰色2.5Y6 1粘質土



1. にぶい黄色2.5Y6 3粘砂質土
2. 灰黄色2.5Y6 2粘砂質土
3. 黄灰色2.5Y6 1粘質土と明黄褐色2.5Y6 6粘砂質土の混合
4. 黄灰色2.5Y6 1粘砂質土
5. 明黄褐色2.5Y6 6と灰色7.5Y6 1の混合粘質土
6. 灰黄色2.5Y6 2と明黄褐色2.5Y6 8の混合粘質土



[溝56堆積層]

1. 浅黄色5Y7/4細砂
2. 灰オリブ色5Y5 3砂質土
3. 灰オリブ色5Y4 2粘砂質土
4. にぶい黄色2.5Y6 3粗砂
5. 灰オリブ色5Y6 2砂質土
6. 灰オリブ色5Y5 3とオリブ灰色5GY5 1の混合粘砂質土
7. 灰オリブ色5Y5 3と明褐色7.5YR5 6の混合砂質土
8. 黄褐色2.5Y5 4砂質土
9. 黄灰色2.5Y5 1粘砂質土
10. 灰色5Y5 1粘砂質土
11. 灰オリブ色5Y5 2粘質土
12. 青灰色5B6 1粘質土

[東壁土層]

13. 灰色5Y6 1砂質土とオリブ灰色10Y5 2粘質土の混合
14. 明黄褐色2.5Y7 6砂質土
15. 明黄褐色2.5Y6 6粘砂質土とオリブ黄色5Y6 3砂質土の混合
16. 黄褐色10YR5 8砂質土と黄灰色2.5Y6 1粘砂質土の混合
17. 灰白色5Y7 1と明赤褐色5YR5 8の混合粘砂質土
18. オリブ黄色5Y6 3と明黄褐色2.5Y6 8の混合砂質土
19. 明黄褐色10YR6 6粘砂質土と灰白色5Y7 1砂質土の混合
20. 灰黄色2.5Y7 2粗砂と明黄褐色2.5Y6 8粘砂質土の混合
21. 黄褐色2.5Y5 6粘質土とオリブ黄色5Y6 3粘砂質土の混合
22. 灰白色2.5Y7 1と黄褐色10YR5 8の混合粗砂

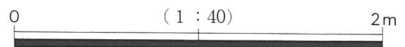


図24 観音寺遺跡溝断面図 (1:20 1:40)

溝65（図20、21、24、写真34、35、表2）

この溝は同じく南西から大溝に注ぎ込む溝である。この溝に溝64と溝55が注ぎ込んでいる。埋土を見るとこの溝はブロック状の堆積層が見られるので人為的に埋められた可能性がある。

溝66（図20、21、写真36、表2）

この溝は東北東から大溝に注ぎ込む溝である。底部に足跡らしい凹凸が数多くある。奈良時代の土師器片や須恵器や時期不明の瓦片が出土している。東側調査区では溝の続きが検出されていない。

B. 落込

落込2（図20、21、写真37、39、40、表2）

この遺構は落込3に切られている。埋土は灰白色砂質土層である。この遺構から土師器鉢型土器の底部が出土した。磨耗が著しい事と体部形状が判明するまでに復元できなかったもので、時期の推定は難しい。

落込3（図20、21、25、写真37、表2）

この遺構の埋土は上層が明褐色灰色粘質土、明黄褐色中砂の混合層、下層は橙色と灰白色粘質土のブロックが混じった混合層である。客土した層である。元々南側に溜池があり、自然地形が低くなっていた所に堆積した可能性がある。この遺構から奈良時代の土師器、須恵器、中世の須恵質土器が出土している。客土を行っている事から中世に大規模な整地を行っていた可能性がある。

C. ピット（図20、21、写真24、表2）

この他ピットが幾つか検出されたが、掘立柱建物には復元できなかった。そして出土した遺物が無かったので時期が推定できない。今回調査した区域は前回東側で調査した中世頃の集落とは溝で隔てられていて、その範囲外と推測される。

D. その他の遺構（図26）

遺構と呼べるか難しいものである。これは南側

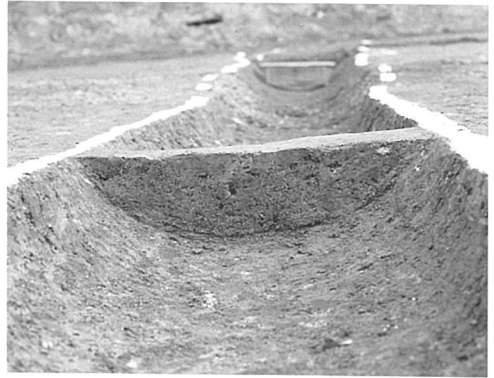


写真26 溝11断面（西より）



写真27 溝53、61、62（北東より）



写真28 溝55（南東より）

壁面にのみ断面図として現れている（図26）。断面図の中の中央付近に盛り上がった部分がある。近世の堆積層Ⅱ層上層に盛土がある。調査時は南端断面から少し北側まで高まりを作って伸びていた。この周辺はもともと南側に高くなる地形なので、下層が窪んでいてこの上層に厚い盛り上がった堆積層があるとは思えなかった。写真と図面の記録を残す事なく掘削した。後に報告書作製段階に至ってその盛り上がりが何かの意味を持った遺構？であった可能性に気づいた。南側の新池に伴う堤の延長部分か、農業用水の排水設備であるのか分からないが、なんらかの高まりが存在した事を書いておく。

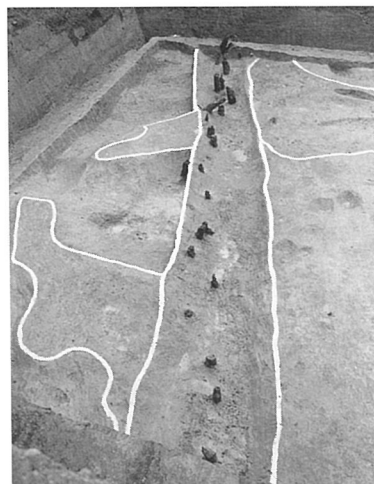


写真29 溝56（東より）

4) 遺物

A. 溝

大溝1（図27、表4）

大溝1は深くて大きな遺構である。下部堆積層出土遺物、中部堆積層出土遺物、上部堆積層出土遺物に分けて記述する。

大溝1下部堆積層出土遺物（図27-4～17、表4）

古墳時代では土師器の甕、須恵器の甕、壺、器台破片が出土している。奈良時代では土師器の甕で口縁部が外側に外反して口縁部先端が外側下方に傾斜する端面を作り、上端部を上方に摘まみ上げて、端部直下のすぐ内側に1条の沈線を入れているもの（図27-11、12、13）や、口縁部が外側に外反して、口縁端部が水平な端面を作るもの（図27-14、15）、外側に傾斜している端面を作るもの（図27-16）等や、壺（図27-10）や高杯で脚柱部があまり長くない形態のもの（図27-8）、坏部がS字状に屈曲して、口縁端部内側に1条の沈線を施しているもの（図27-5、6）などが見られる。羽釜（図27-17）や皿、須恵器の壺（図27-9）、甕、坏身（図27-4）、平瓦片などが出土している。そして瓦質のような焼成をした須恵



写真30 溝56断面（西より）



写真31 溝61内 遺物出土状況（南西より）

質の高杯脚部（図27-7）がある。この資料は坏部下から細い脚柱部を経て裾部へきれいな曲線を描きつつ開いている。内外面は回転ナデで、奈良時代の須恵器高杯に透かし穴がないように、この高杯も透かし穴が無い。胎土も精選されていて須恵器の胎土とは異質の白色の均一な色調を示す。

脚部の曲線も技量のある工人による製作を窺わせる洗練されたなだらかな曲線を描いている。しかし焼成は須恵質と言っても中世の瓦質土器に非常に似ている。しかしこの瓦質に似た高杯は全く変質もしていないし、表面も磨耗していない。そして坏部や脚端部が欠損している事から時代性を追求する判断材料に乏しい。そして奈良時代の須恵器の一種と理解すると形態的に違和感がない。即ち奈良時代の須恵質高杯は括れた脚柱部から下方に曲線状に開く形態を示す。そして脚端部で下方に短く垂下している形状の脚柱部と理解すると違和感がない。焼成の面から見ると須恵質とは言いがたい、砂粒を全く含まない均一な少しクリーム色がかった胎土で、須恵器の灰色ではない。この遺物に付いて秋山浩三氏の御教示によれば長岡京時代に少量あり、このような瓦質に似た焼成を持つ須恵器が出土するそうである。従ってここでは須恵器として表示する。胎土や焼成、瓦質そっくりである事から国内産でなくて、輸入品の可能性も考えられよう。

大溝下部から出土した遺物の大半は奈良時代である。大溝が掘削されたのは奈良時代のものである。大溝から古墳時代後期の遺物も出土しているが、大溝の周囲に古墳時代後期の古墳やその他の遺構が見られる事から、奈良時代の開発時にそれらの遺構が削られ、大溝に入ったのではないかと考えられる。そして圧倒的に出土した数が少ない事も上げられよう。

しかし溝の開削時期については大溝が幾度か改修直して使用している可能性があるけれども、最初に開削された時の堆積層と思われる下部下層の暗灰色系の粘質土層で、上に黄色系の粘質土層を被っている層の中から奈良時代の須恵器が出土している事から奈良時代は動かないと思われる。しかもこの須恵器は坏身で奈良時代中頃以降の形態を示している事から、この時期に近い奈良時代中頃前後に開削された可能性がある。

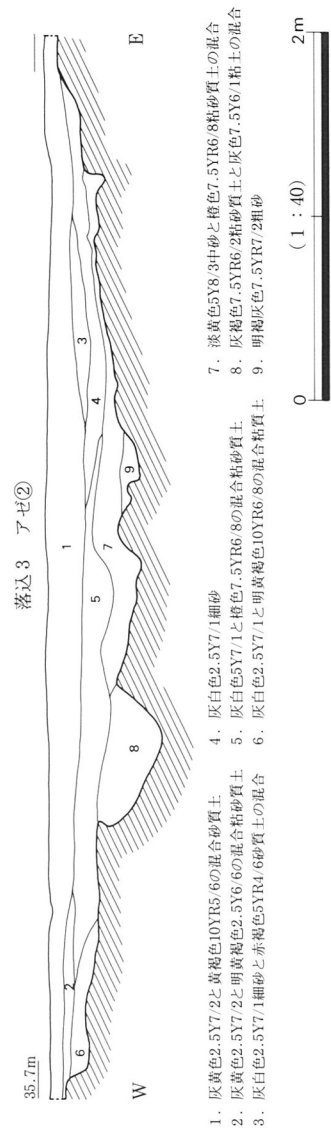


図25 観音寺遺跡落込3 断面図 (1:40)

大溝1中部堆積層出土遺物(図27-3、表4)

奈良時代の須恵器甕や鉾滓2点が出土している。この堆積層から須恵質のすり鉢の底部(図27-3)が出土している。この資料は底部に回転糸切り痕を残している。また色調も白色に近く、精選された均質の粘土を使用している。この色調からすり鉢は陶邑の製品や東播系の製品とは思えない。口縁部が欠損しているので土器の特徴がいま一つ明らかにできないし比較検討ができないが、搬入された鉢の可能性が高い。生産地はまだ推測できない。奈良時代を過ぎると大溝下部がすでに埋没して、大溝中部が窪んだ状態にあった事が推測される。奈良時代以降から中世のある時期までは窪んだ状態で放置されていた時期がありそうである。

大溝1上部堆積層出土遺物(図27-1、2、表4)

古墳時代では須恵器甕や坏、円筒埴輪が出土している。円筒埴輪は須恵質で体部外面は10/cmの縦

ハケ、内面は縦ハケで5/cmを示す。また奈良時代前半かと思われる須恵器で甕、壺、坏蓋、高台付き坏や摘み付き坏蓋がある。また土師器は羽釜、椀、平瓦などがある。平安時代は須恵器甕や体部外面に叩きのない壺がある。中世は土師器の小皿、羽釜、瓦質の小皿(図27-1)、椀(図27-2)、羽釜、中世陶器の甕、丹波焼き甕や時期不明の青磁、鉾滓破片などが出土している。大溝上部の窪みには中世の遺物が数多く含まれている。中世には大溝中部がすでに埋没して溝上部に窪みが残り湿地状を示して底に灰色系の粘土層を堆積している。灰色粘土層の底部と黄色系の中位段丘層に足跡が残したと思われる数多く凹凸が見られる。この凹凸は断面や平面で確認した。

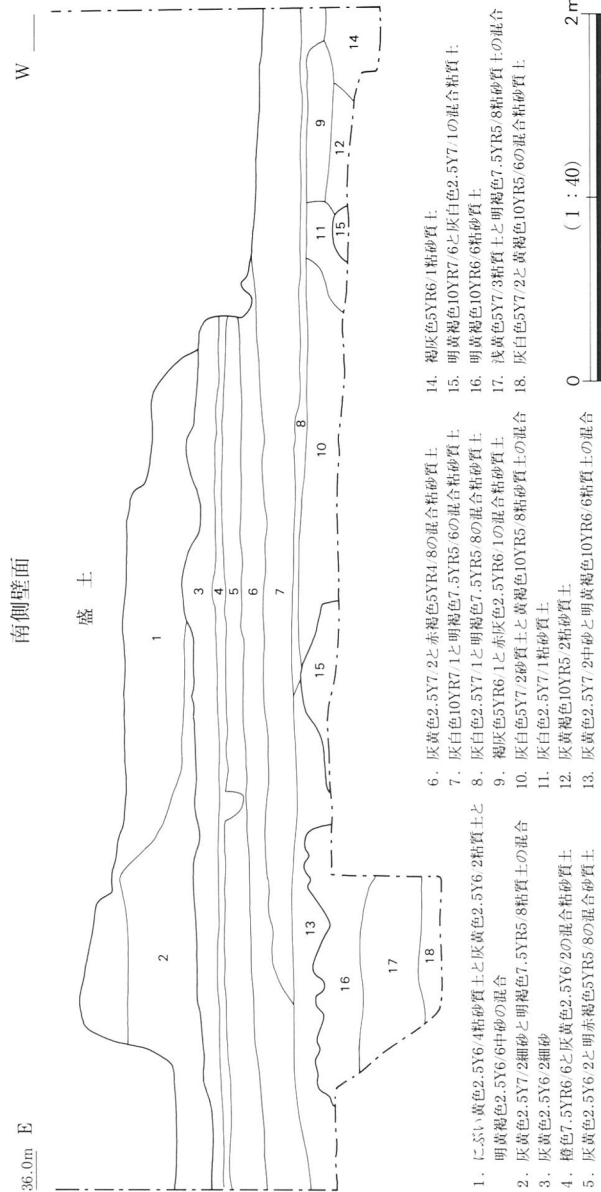


図26 観音寺遺跡南側壁面図(1:40)

溝 2 上層

奈良時代は須恵器の坏蓋や甕、壺、中世は土師器の小皿や丸瓦、近世は陶器の鉢や染付、土師器の碗などが出土している。近世、近代の遺物が出土している事から非常に新しい時代まで使用されていた溝である。

溝 2 下層

奈良時代の須恵器の壺や中世の土師器の羽釜や小皿、瓦器碗、中世陶器が出土している。そして、丹波焼の壺、近世の染付や唐津焼が出土している。溝 2 上層への付け替えは調査区南側

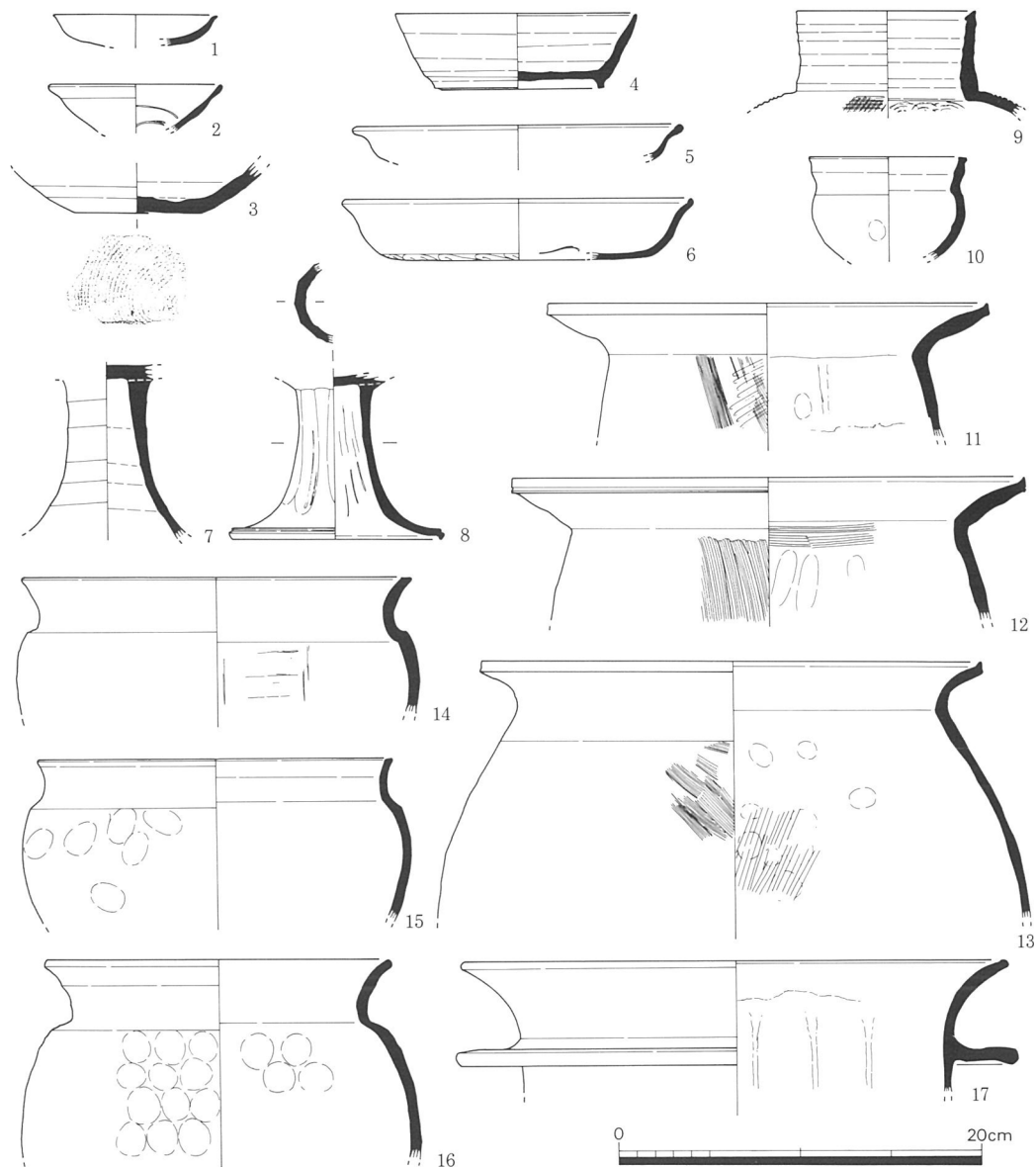


図27 観音寺遺跡大溝 1 出土遺物 (1 : 4)

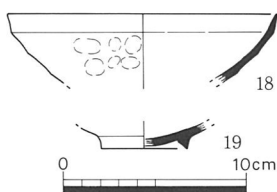


図28 観音寺遺跡溝11出土遺物（1：4）

にある新池の築造が契機となって周囲の水田区画や灌漑用水路が新しく改変された可能性があるようだ。

溝60

奈良時代の土師器の坏破片、須恵器の破片が出土している。

溝61（図29-21、21、表4）

この溝から奈良時代の須恵器の坏口縁部や甕、坏身で口縁部は底部から斜め外上方に少し膨らみつつ上がっているもの（図29-20）、口縁部は底部から少し外側に伸びて、上方に立ち上がって高台は外側に張り出しているもの（図29-21）がある。

溝63

この溝からは数多くの遺物が出土している。奈良時代は須恵器の甕や壺、底部系切りの鉢、坏では無高台でやや内湾気味に立ち上がっているものやまた土師器の羽釜や甕、壺、時期が明らかでない須恵器の甕がある。そして中世では土師器の羽釜や小皿、瓦質土器で椀やこね鉢、体部外面を叩いた甕、丸瓦が出土している。大溝下部、中部が埋没した跡の窪んだ箇所注ぎ込む溝であるが、この中から中世の遺物が相当量出土している事から判断すると、中世に大溝中部が埋没した跡にも浅い流れに注ぎ込むのがこの溝63であるらしい。

溝66上層

この溝から奈良時代の土師器破片や須恵器の甕、丹波焼の壺、近世の染付や唐津焼が出土している。



写真32 溝61断面（南より）



写真33 溝63（北東より）



写真34 溝63, 64, 65（東より）

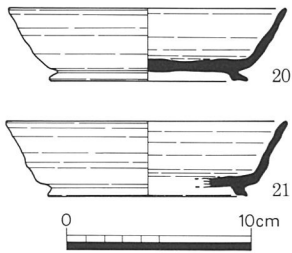


図29 観音寺遺跡溝61出土遺物（1：4）

この事から近世前半期まで溝2下層が機能していたが、こののちに溝2上層に付け替えられたと推測される。溝幅が狭くなったのは溝の性格が変わった可能性がある。

溝11（図28-18、19、表4）

この溝からは奈良時代の須恵器の甕や壺、中世では土師器の碗や小皿、瓦器碗（図28-18）や坏高台部（図28-19）が出土している。そして近世陶器の碗も出土しているが、これは混入のようである。この遺構は埋土の色調が溝2下層に似ていることから中世の遺構と推測したい。溝2下層と同じ頃に機能していて、溝2上層時には廃絶していた可能性がある。溝11が廃絶して、溝2が下層から上層に付け替えられる頃に、この周辺で水田区画と灌漑水路の再整理がなされた可能性があるようだ。

溝53

この溝から土師器の破片が出土している。奈良時代前半期に相当する須恵器、坏身が出土している。

溝56

奈良時代の須恵器の甕、平安時代の須恵器の壺、中世の平瓦や丸瓦などが出土している。上層には府道中央環状線建設に着手するまで使用されていた溝があり、下層には古い時期の溝が重複している。奈良時代から中世までの遺物は恐らくは中世に掘られて使用されていた溝に奈良時代の遺物が混入していたと考えられる。重複している上層の時期不明の土師器の破片や平瓦の破片などが出土している。

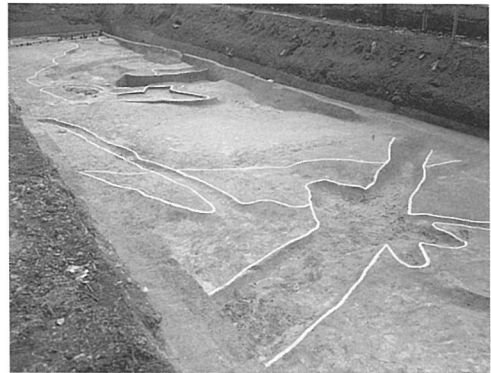


写真35 溝56, 64, 65（北東より）

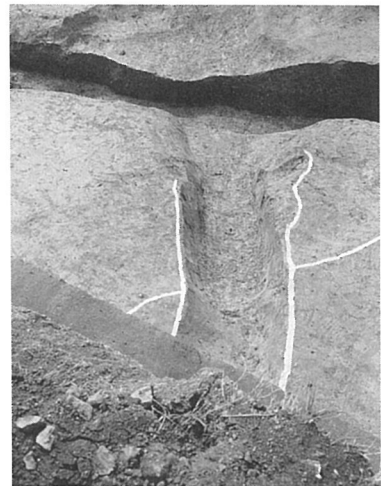


写真36 溝66（北東より）

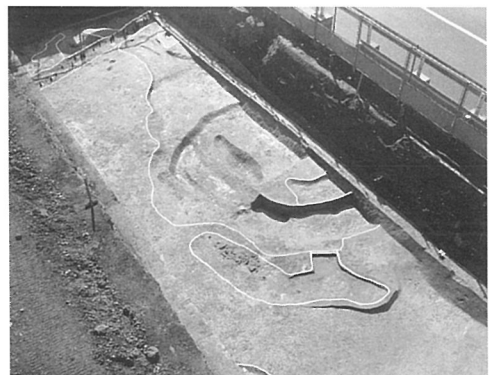


写真37 落込1, 2, 3 溝56（北東より）

溝66下層

溝下層からは時期不明の平瓦らしい遺物や須恵器甕の破片が出土している。時期は判断できない。

B. 落込

落込 1

遺構内から土師器の鉢破片が出土している。

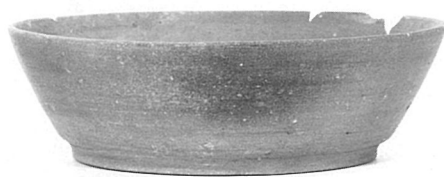


写真38 大溝 1 出土遺物須恵器 (図27-4)

落込 2

遺構内から土師器の大型と推定される鉢の底部が出土している。しかし全体が復元できないので、時期は分からない。

落込 3 上層

奈良時代の土師器の皿や羽釜、須恵器の鉢、甕口縁部も出土している。中世の須恵質土器底部や糸切り底のこね鉢底部などが出土している。これらは落込 3 が埋没時に窪んでいて、この箇所には堆積したⅢ層から出土した遺物と推測している。

C. ピット

ピットは幾つか検出されたが、遺物は出土しない。



写真39 落込 2 遺物出土状況 (東より)



写真40 落込 2 (北東より)

第V章 まとめ

1) 旧石器、縄紋、弥生時代

丹上遺跡、観音寺遺跡ともサヌカイトの剥片がⅡ層から出土している。剥片から時期を推定す

る事ができない。旧石器時代、或いは縄紋時代、弥生時代のうちいずれかの遺構が近くにある可能性を示している。これらの石器剥片資料に土器資料が伴う事がごく少数ある。これまでの調査では縄紋時代晩期の資料に伴う例や石鏃に伴う例が見られる。石器剥片資料が多い事から単純に旧石器と推測する事ができないようだ。今後様々な資料の蓄積を待つ以外ない。弥生時代は河内平野に弥生文化が大きく開花した。この前後から中位段丘上にも多くはないが幾つかの集落が作られていたようである。しかし今回の調査では弥生時代と断定できる資料は得られなかった。また土坑24内から時期の分からない土器が出土している。中位段丘上に奈良時代以前に生活していた人々がいる事を示しているが、残念な事に詳しい時期は分からない。そして落込7の下層にも遺構番号を付けていない土坑があり、この土坑も土色が類似している事から同様な時期に作られた遺構の可能性もある。これらの遺構を残した人々と、中位段丘上から少量出土している剥片資料のうち一部分はこれらの人々が関与していた事を推測しても誤りではないだろう。この他には遺構ではないが風倒木痕が数多く検出されている。風倒木痕の形成された時代は明確ではないが、ある程度の樹木が生育していた時代があった事を示している。森林のような景観を示していたか分からないが、ある程度樹木が生育した環境だったと考えられよう。

2) 古墳時代

丹上遺跡の大溝1は古墳時代後期頃から奈良時代にかけて中位段丘上面を流れていた自然流路と考えられる。溝5は奈良時代頃に大溝1の流路に沿って掘られた溝で、大溝から取水して水田に灌漑していた溝の可能性もある。そして途中から分岐して他の地域の水田に導かれていた可能性がある。大溝の中から埴輪片が出土している事から、奈良時代の周辺の開発時があるいは条里制施行時に近くの古墳が削られて、埋もれていた埴輪が運ばれて、II層から出土したらしい。胎土分析結果から、丹上、観音寺遺跡出土の須恵器は分布域が非常に似ている。しかし両遺跡で微妙に異なった領域を示している元素が少し存在することから、近くで生産されていて異なった窯の須恵器を入手していたかも知れない。丹上遺跡、観音寺遺跡は古墳時代後期は視界内に河内大塚山古墳の威容が眼前にある。そして遠く離れて古市古墳群、百舌鳥古墳群や南の黒姫山古墳などの巨大古墳が数多く見る事ができたはずである。巨大古墳と共に至近距離に小古墳群が幾つか造営されて、周囲一带に数多くの古墳が並んでいた景観であったようだ。しかし当時は現状のように周囲が一望できる環境ではなくて、相当樹木が繁っていた環境であった可能性が高かったようだ。このような状況から推測すると、遠距離の古墳群は自然の緑の環境とは異質な葺石や埴輪が立ち並ぶ姿を樹木の間から覗かせていたような景観が推測されるのではなかろうか。

3) 奈良、平安時代

丹上遺跡はこの時代の遺構は見られないが、須恵器、土師器などが少し出土している。南側にある掘立柱建物群に伴う遺物がのちの条里制施行時の整地に伴って遺構が削られてII層中から出土したと考えられる。丹上遺跡の調査地南側にある律令期の掘立柱建物が方形に建ち並んでいる遺構は、今回調査した区域から出土した遺物でみれば奈良時代でも中頃から後半にかけて機能し

て、黒色土器を伴う頃に廃絶していった短期間の遺構と考えられる。恐らくは丹比道を通して都へ貢納される物資や、都から地方の国衙へ輸送される物資などの管理を行う為の役割を担っていた物資の流通を管理するような機能が考えられよう。輸送に使用されていた馬などを中継して扱う駅屋として理解するには建物の配置や構造が少し違っているようだ。丹比道では人々の話声や馬のいななきが聞こえたりした、官道の持つ賑やかな喧騒が聞こえていたかも知れない。観音寺遺跡の奈良時代の溝61、53については、溝61から須恵器坏身が出土して、幅が狭く浅く少し蛇行した溝であるが、奈良時代はすでに人々がこの中位段丘上に生活していた事を物語っている。これらの細い溝は切り合いを持って多少時期差があるが、奈良時代集落に関連して何らかの機能を果たしていた溝である。中世の頃に東側の調査区に南北に溝1が通っていて、古代と同様に農業用水路として機能していた。それと同様に奈良時代の溝3も集落を画する機能もあわせ持っていたかも知れない。そして溝の西側にも少しであるが時期が分からない掘立柱建物が存在している。もし奈良時代に属するとすれば奈良時代集落は溝にある程度は規制されながら、溝の範囲外まで広がっていたようだ。観音寺遺跡の大溝は下層から奈良時代後半期頃の遺物を出土している事から奈良時代の後半期に使用され始めた農業用幹線水路としての機能が花粉珪藻分析から考えられる。奈良時代には下部が埋没して、長く使用された溝ではない。そして大溝中部は奈良時代以降の埋没時には浅く窪んだ状態にあり、中世まで窪んだ箇所が水路として使用されていた。ここに足跡などの踏み込み跡が残って、最終的に中世頃に埋没したようだ。大溝は前回の調査区で溝1との関係が明らかにされていないが、溝1から分岐しているようである。そして中世の溝1は古代の溝3と一部分重複している。そして古代の溝3は平安時代まで使用されていた溝と理解されている。これらの事から推測すると溝3は中位段丘上面の尾根筋を通っている事から、この中位段丘上の農業幹線水路の可能性がある。そしてこの溝3は遡れば古墳時代終末期の7世紀の初頭前後に狭山池が掘られて、その時に幾つかの中位段丘の尾根筋近くに主要な農業幹線水路を掘って、灌漑水利体系を整備した時の水路の一つと推測される。その後狭山池は堤が破れて廃棄され、奈良時代頃に再び改修して狭山池の機能を再度回復している。この時の水利体系の整備時に新たに掘られたのが大溝ではないだろうか。時期的な事から考えればこのような調査地点付近での変遷が推測されよう。そして大溝と角度を違えて北西方向に伸びる斜行溝は新池から斜めに北西方向に延びて、南東側にある東除川から北西側へ延びる丹比道と直線的に結ばれる事から、斜行溝と丹比道が奈良時代の関連した遺構として理解すべきなのかも知れない。そして斜行溝と今回調査した大溝は同様な農業幹線用水路の機能を持っていて、松原市の上田町方向の大きく広がる地域の中央部分付近へと、水を導いていたようだ。この溝の源流は狭山池に蓄えられた農業用水で、中位段丘上に造られた溜池に配水しながら、大和川流域近くまで潤していた役割が考えられよう。一方大和川方面への農業用水路は溝3を通して北へ流れて、中位段丘上を下り、大堀から長原方面に中位段丘上の尾根筋を通して、農業用水を得にくい地域の溜池に給水していたと考えられる。

4) 鎌倉、室町時代

丹上遺跡で検出された落込は中世の可能性がある。この頃に客土と整地がなされて、条里制が区画された可能性が高い。即ちこの中位段丘上面の条里制は中世に入ってから施行された可能性も考えられる。丹上遺跡のⅡ層出土遺物は中世後半期に入る前後の頃を示している。当遺跡のみならず周辺の中位段丘上に立地している遺跡の床土層からも同様な時期の遺物が出土している状況がありそうだ。このような状況から中世後半期頃に中位段丘上面での大規模な条里制が施工され始めたのではないかと推測する。この時期はおおよそではあるが12世紀後半から13世紀頃にかけての時期を推定しておきたい。そうした時、河内平野の沖積地での条里制施行時期との違いが問題となるが、これは条里制が一時期に河内平野全面に施行されたのではなくて、段階を経て順次条里制が施工されていたようだ。条里制は一定の広い面積の客土や整地の工事や溜池などの土木工事や灌漑水利体系を整備して溝の開削も併せた大規模な工事で、関係する範囲内での利害の調整と整理、そして大多数の労働力を集中できて、それを自在に動かせる力のある者の登場を必要として初めて可能である。これらの条件が揃って始めて施工できる事業と考えられる。このような難作業を施工したのは調査地周辺に強大に成長しつつあった中世領主層と考えられて、そのような権力の成長の一定の成果として理解できるのではないだろうか。

観音寺遺跡は中世には溝2下層や溝56下層が機能して、東側調査区中央を南北方向に縦断している溝1から供給される農業用水を西側に広がる緩やかな地形に開発されていた水田に導いていたと考えられる。古代には北西方向に伸びていた溝が、中世には東西方向に変わっている。周辺に施工された条里制が溝の方向を大きく規制しているようだ。南北の集落の西端を画する溝1は狭山池を発して中位段丘上の尾根筋を延々と河内平野部方向へと中位段丘上に掘られている農業幹線水路である。この地域の農業開発史は、狭山池との関わりの中で、大きく影響を受けて変質していた事が読み取れそうである。

5) 安土桃山、江戸時代

この時代は丹上遺跡、観音寺遺跡とも前の時代に引き続いて中位段丘上面のほとんどが水田開発されていた可能性がある。前代の開発経過を踏まえて、より一層の溜池の築造や水利体系を改良した作業が実施された可能性がある。そして江戸時代前期に施行された大和川の付け替え工事の結果、大和川以北は灌漑範囲から除外されて従来より狭山池の潤す灌漑面積が減少して、狭山池の負担が減少している。大和川からの利水が大和川以北で実施されて、狭山池からの農業用水は大和川以南の上流側の区域を充分潤す事ができるようになったようである。大和川の付け替え工事の主たる目的は天井川化した河川の氾濫防止にあるが、その背景には狭山池の灌漑面積の増大に伴って、必要な農業用水量が増大しつつあり、狭山池の貯水量では対応仕切れなくて、不足していたのではあるまいか。恐らく近世には中位段丘上面も大半の土地が開発しつくされて、溜池も開析谷の跡や条里制の区画を使用した皿池など、数多く作られて、狭山池の水利と溜池灌漑によって、より一層の耕地拡大がなされて、広大な面積の耕作地を潤す環境が次第に整備されていったようである。

表 1 - 1 丹上遺跡遺構一覽

遺構番号 本報告	地区割	規模 (ca)			主 要 埋 土	形状	本文P.	遺 構		出土 遺物図	備 考
		長さ	幅	深さ				図	写真		
大溝1	K16fgh10	3840	1380	46	にぶい黄褐色10YR4/3砂質土	溝状	15,28	7,8,9	4.5.6.7	14	土師器 甕, 壺蓋破片
溝1	K17d3	130	15	7	にぶい黄色2.5Y6/3粘砂質土	長円	16	8,10			
溝2	K17e2	165	25	22	灰黄色2.5Y6/2粘砂質土と明黄褐色2.5Y6/8粘砂質土の混合	長円	16	8,10			
溝3	K17d1	140	50	13	浅黄色2.5Y7/3と黄色2.5Y7/8粘砂質土の混合	長方形	16,28	8,10			須恵器 杯身, 甕
溝4	K17d1	250	40	12	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土と明黄褐色2.5Y7/6粘砂質土の混合	長円	16	8,10			
溝5	K16e.f10	2695	55	20	明黄褐色2.5Y6/8粘砂質土と灰黄色2.5Y7/2粘砂質土の混合	溝状	16,28	8,10	8,9,17,18		須恵器 杯蓋, 壺
溝6	K17e1	110	25	7	明黄褐色10YR6/8と灰白色10YR7/1粘砂質土	長円	18	8,10			
溝7	K17e1	150	55	9	明黄褐色10YR6/8粘砂質土と灰黄色2.5Y7/2粘砂質土の混合	楕円	18	8,10			
溝8	K17f1	190	35	20	浅黄色2.5Y7/4と灰黄色2.5Y7/2粘砂質土の混合	長円	18,29	8,10			土師器 鉢頭部
溝9	K17f1.2	180	25	3	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土	溝状	18	8	12		
溝10	K17f2	55	13	4	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土	長円	18	8	12		
溝11	K17f1	55	9	2	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土	長円	18	8	12		
溝12	K17f2	47	11	2	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土	長円	18	8	12		
溝13	K17f1	40	6	2	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土	長円	18	8	12		
溝14	K17f1.2	38	27	6	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土	楕円	18	8	12		
溝15	K17f2	31	9	2	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土	長円	18	8	12		
溝16	K17f1.2	37	10	2	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土	長円	18	8	12		
溝17	K17f1.2	53	13	2	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土	長円	18	8	12		
溝18	K17f1.2	83	21	3	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土	長円	18	8	12		
溝19	K17f1	64	17	3	灰黄色2.5Y7/2粘砂質土	長円	18	8	12		
溝20	K17f2.3	210	33	24	明黄褐色10YR6/8と灰白色10YR7/1のまだら模様粘砂質土	長円	18	8,10			
溝21	K17f3	160	45	22	にぶい黄色2.5Y6/4灰黄色2.5Y7/2のまだら模様粘砂質土	四角	18	8,10			
溝22	K17e2	50	13	4	にぶい黄色2.5Y6/3粘砂質土と明黄褐色2.5Y6/8粘砂質土の混	長円	20	8,10			
溝23	K17e2	50	10	12	明黄褐色2.5Y6/6粘砂質土	長円	20	8,10			
井戸1	K17f2	236	201	123	にぶい黄褐色10YR7/2シルト質土	楕円	20,29	8,11	10,13,14,15	17	須恵器 甕, 杯蓋
土坑1	K17d3	136	65	60	にぶい黄褐色10YR6/3粘砂質土に灰白色5Y7/2砂混じり	長方形	20	8,11			
土坑2	K17d.e3	185	56	40	にぶい黄褐色10YR6/4粘砂質土	半円	20	8,11			
土坑3	K17d2	188	88	20	黄褐色2.5Y7/2粘砂質土に明黄褐色10YR6/8が混じる	台形	20	8,11			
土坑4	K17d1.2	210	56	16	にぶい黄色2.5Y6/4と明黄褐色2.5Y6/6粘砂質土の混合	長円	20	8,11			
土坑5	K17e2.3	152	121	14	にぶい黄色2.5Y6/3と明黄褐色2.5Y6/8の混合粘砂質土	楕円	20,29	8,11			
土坑6	K17e1	50	36	8	不明	タマゴ					
土坑7	K17e2	58	35	12	にぶい黄色2.5Y6/4粘砂質土(小石混じり)	タマゴ	20	8,11			
土坑9	K17f2	74	22	6	明黄褐色2.5Y6/8と灰白色2.5Y8/1の混合粘砂質土	長円	20	8,11			
土坑10	K17f2	177	24	4	明黄褐色2.5Y6/8と灰白色2.5Y8/1の混合粘砂質土	長円	20	8,11			
土坑11	K17f1	101	45	14	にぶい黄褐色10YR6/4とにぶい黄褐色10YR7/2のまだら模様粘砂質土	瓢箪形	21	8,11			
土坑12	K17e.f1	76	53	7	明黄褐色2.5Y6/6と灰黄色2.5Y7/2粘砂質土の混合	楕円	21	8,11			
土坑13	K17f1	66	70	11	明黄褐色2.5Y6/6と灰黄色2.5Y7/2粘砂質土の混合	半円	21	8,11			
土坑14	K17f1	172	63	8	明黄褐色10YR6/8粘砂質土と灰白色10YR7/1粘砂質土の混合	長円	21	8,11			
土坑15	K16e.f10	110	79	18	明黄褐色2.5Y6/8粘砂質土と灰黄色2.5Y7/2粘砂質土の混合	長円	21	8,11			
土坑16	K17f2	271	59	15	にぶい黄褐色10YR6/4とにぶい黄褐色10YR7/2粘砂質土	長円	21	8,12	13		
土坑17	K17f.g2	310	206	15	黄色2.5Y8/8と灰黄色2.5Y7/2粘砂質土の混合	四角形	21,29	8,12	13		土師器 鉢縁
土坑18	K17g2	124	78	45	黄色2.5Y7/8と灰黄色2.5Y7/2粘砂質土の混合	長方形	21,29	8,12	13		須恵器 甕, 瓦片
土坑19	K17g2	162	56	13	明黄褐色10YR6/6と灰黄色2.5Y7/2まだら模様粘砂質土	長円	22	8,13			
土坑20	K17g2	68	33	5	不明	V字形					

表 1 - 2 丹上遺跡遺構一覧

遺構番号 本報告	地区割	規模 (cm)			主 要 埋 土	形状	本文P.	遺 構		出土 遺物図	備 考
		長さ	幅	深さ				図	写真		
土坑21	K17h1	42	20	2	不明	タマゴ					
土坑22	K17f2	370	85	24	明黄褐色2.5Y6/6と灰黄色2.5Y7/2粘砂質土の混合	長方形	22	8,13	12		
土坑23	K17e2	49	45	5	灰黄色2.5Y7/2と明黄褐色2.5Y6/6粘砂質土の混合	台形	22	8,13			
土坑24	K17h1	105	95	36	不明	円	22,29	8	19		
落込1	K17ef2	580	190	10	灰黄色2.5Y6/2粘砂質土	不定形	22	8,15	14		
落込2	K17f2	145	38	6	明緑灰色5G7/1粘砂質土と灰色7.5Y5/1砂質土の混合	不定形	24,30	8,15	14,15		土師質 土器碗
落込3	K17f2	325	85	12	にぶい黄色2.5Y6/3粘砂質土と黄褐色2.5Y5/6粘砂質土の混合	不定形	24	8,15	13,14,15		
落込4	K17f2	152	65	21	灰黄色2.5Y7/2粘質土	長円	24,30	8,15	10,13,14,15		須恵器 罍
落込5	K17fg1	660	185	14	にぶい黄色2.5Y6/4粘砂質土に灰白色2.5Y8/2砂混じる	不定形	24,30	8,15	12,16		土師器 円筒状土器
落込6	K17g2	150	135	4	明黄褐色10YR6/6と灰黄色2.5Y7/2のまだら模様粘砂質土	三角形	25,30	8,15	16,17		土師器破片
落込7	K17gh1.2	765	405	55	明黄褐色2.5Y6/6と灰黄色2.5Y7/2のまだら模様粘砂質土	不定形	25,30	8,15	16,17		須恵器 杯身破片
落込8	K17g.h2	110	22	16	明黄褐色10YR6/6と灰黄色2.5Y7/2のまだら模様粘砂質土	不定形	25	8,15	16,17		
落込9	K17h2	75	35	7	黄褐色10YR7/8と灰色2.5Y7/2のまだら模様粘砂質土	台形	26	8	16,17		
落込10	K17h2	55	30	4	黄褐色10YR7/8と灰黄色2.5Y7/2のまだら模様粘砂質土	不定形	26	8,15			
落込11	K17f1.2	365	82	20	明黄褐色10YR6/6粘質土に灰黄色2.5Y7/2粘質土混じる	長円	26	8,15	12,15		
落込12	K17gh1	155	85	19	明黄褐色10YR6/6と灰黄色2.5Y7/2のまだら模様粘砂質土	不定形	26	8,15	17,18		
落込13	K17h1.2	138	69	6	浅黄色2.5Y7/3粘質土	不定形	26	8,15	16,18		
落込14	K17e3	70	30	7	黄褐色2.5Y5/6粘質土	不定形	26	8,15			
落込15	K16d10	1295	95	13	灰黄色2.5Y7/2と明黄褐色2.5Y6/6粘砂質土の混合	溝状	26,30	8,16			陶磁器 染付破片
ピット1	K17d2	23	20	6	不明	円	26	8			
ピット2	K17d1	29	23	9	不明	タマゴ	26	8			
ピット3	K17e2	40	35	14	不明	楕円	26	8			
ピット4	K17f3	16	12	7	不明	長円	26	8			
ピット5	K17f2	25	24	7	不明	円	26	8			
ピット6	K17f3	22	18	4	不明	楕円	26	8			
ピット7	K17g2	20	20	6	不明	円	26	8			
ピット8	K17h1	19	19	5	不明	円	26	8			
ピット9	K17h1	25	20	2	不明	長円	26	8			
ピット10	K17g2	24	23	6	不明	四角	26	8			